女鑑

明[illegible]月十四日發行

第七十號

東京國光社

女鑑第七十號目次

中將姫



女鑑　第七十號

女鑑

長夜の燈影

昨日まで早苗とりしがいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く

とは、もろこし、宋の朱喜が、

昨夜地塘春草夢　階前梧葉已秋聲

と吟じたると、恰、其の意の一にして、而も、其の情の、一層に切なるものありて、いたく、讀む人の腸を斷たしむるものは、全く、日本歌の、能く、大御國人の性に適へるが爲なるべし。

抑、天地の間、四時の移り變ること、眞に速なるは、この歌どもの如く、唯、一瞬

の間ともいひつべし。斯くて、暑に苦しみし夏は、昨日の夢となり、萩の白露、秋風に掃はれ、庭の鈴蟲、月影に鳴き、長き夜の燈の影に、書くり繙げ、琴かき鳴らし、或は、其の心を慰め、或は、其の意を凝らし、其の精神を養ひつゝ、學問を研磨するは、處女の、家庭にありて、一般に務むる所なるべし。こは、寔に宜し。宜しく、此の如くにして、此の秋の長き夜を、徒に費さず、學問上の利益を得んことを務むべし。然れども、吾人が、屢いへる如く、今日は、非常の心得あるべき時なれば、縱令、直接に、其の身に關することなきも、宜しく、其の心を以て、先、其の用、を愼み、我が國民同胞の爲に、其の欲する所をも忍ぶは、我が　皇室に盡し奉る臣民の本分にして、一日も、忽にすべからざる所と謂ふべし。

斯く、時事の急なる時にありて、各、其の從ふ所の業に依りて、盡す所あるは、我が大御國の臣民、忠愛の天性、自、然る所なれば、愈、これを勵まして、古の人人の爲しゝ所に劣らざらんことを希はざるべかず。されば、學事の餘暇を以て、燈の影に、恤兵贈遺の品を製し、或は、消毒繃帶の材料を造り、遠征の將士が、國事に奮勵する勞苦を慰むることを爲さば、月澄み、風清き夜半も、蟲の聲を聞きつゝ、其の務を盡すことを得べく、雨の日、音なふ人もなき時も、恰、身、戰場にあらん心地して、雄々しく、勇ましく、自、其の徒然をも慰むることを得べけん。

我が大君の、皇御軍を出ださせ給ひしは、實に、我が大御國の爲に、千歳の一時ともいふべき好機にして、彼の清國をして、我が大御國の稜威の風に靡き從は

しむべきは、この時にあらずして何ぞ。あゝ、四千萬の臣民たるもの、おのもおのも、其の力の有らん限を盡して、速に、此の大事を成し終へ、秋津島根の動きなく、富士の高峯の譽、世に高く、永く、久しく、其の極なからんことを願はざるべけんや。

論說

女子の品位を高むるには父母其の責に任ぜざるべからず

永倉勝清

天の、人類を生殖するや、男は、自由活潑の稟性を具し、自、外を務むる權利あり。女は、順柔質素の品行を備へ、專、兒子を養護し、內を助くる情義あり。鴻荒の世、男女ありて、始めて、夫妻の儷偶を約し、夫妻の儷偶は、子孫兄弟の、

由りて起る所にして、之を、人倫の大綱とす。自古以來、亞細亞洲の風習を觀るに、男子の、婦女に於ける、大率、奴隷視して、一種同等の生殖に非ざるに近し。其の習慣たるや、千有余年の星霜に馴致せられ、敢て、一朝に渙散すべからざるは、復、止を得さる通患と謂ふべし。且、夫、男子の誘掖、偏に、完備なりと雖、婦女訓誨の道なく、淫褻浮奢の風あるときは、男子活潑にして、外に働あるとも、豈、一家の治安を全うするを得べけんや。所謂、一家の治安は、一國治安の雛形にして、須臾も、忽諸に附すべきに非ず。渾て、兒女の習慣は、教師の訓誨を受くるより、朝暮、父母の動作を見聞し、自然に慣れ、自然に習ひ、識らず知らず、薫陶感化して、其の氣風を成すものなり。されは、其の父母、平常、鄙野の所業あらは、其の兒女、必、鄙野ならざるを得ず。故に、英智

賢明の子女を生育せんと欲せば、内は、父母、平素の容儀を謹愼し、兒女を、善良に誘導し、外は、良師の敎訓と、政府の保護とを受けて、初めて、英敏の子女を薫育し、純良の風俗を溶化することを得ん。然らば、此の三の者は、恰、鼎足の如くにして、其の一をも缺くべからざるものなりといふべし。

輓近、女學の進歩せる、決して、昔日の比にあらず。故に、連年、卒業生の輩出する、小少にあらざるなり。洵に、國家の慶事と謂ふべし。然りと雖、物、一利あれば、一弊を生じ、一得あれば、一失を萠す、これ、勢の已むべからざるものにて、かくの如く、卒業者の輩出するにもかゝはらず、其の風俗を移易し、品位を高尙なしむるに乏しきは、遺憾と謂ふべし。畢竟、子女たるもの、父母平素の動作を見聞し、善には移り難きも、惡には變じ易くして、未、必しも、朝暮の見

聞に由り、子女の風習を感化せざる者あらず。然れば則、一般子女の風習を正すは、政府の威令を以てするか。未、可とするに足らず。教師の嚴責に任ずるか。未、可とするに足らず。蓋、慈母保傅に直接する功益、最、其の多きを占むるは、必然の理なり。

吉田松陰先生著す所の武教講録を讀み、子孫教戒の部に至り、殊に感ずる所深し。先生、女兒の風習、淫褻に赴くを以て、率先、其の弊根を矯正せんことを企てられたり。先生、道山の客となる、茲に三十有余年。當時、攘夷の論、沸騰し、新法、未、開けずして、頑夢、未、覺めず。然るに、先生、天下の憂に先ちて憂ひ、時運を洞察して、大に爲す所あらんとせしも、不幸にして、其の事果さず。猶、常に、教育の事を論じて曰はく、平常、無事の日に在りては、貝原氏の

教育等に於いて餘りありと雖、艱難非常の時に際會しては、其の教法に依るのみを以て足れりとせず。何となれば、凡、妻婦たる者、夫の、出でゝ、仕官するときは、內に居て、家を理め、兒子を教育する義務あり。然るに、もし、柔弱暗愚なれば、其の家を理むること難し。況、養育の道を知らずして、其の子孫に、英兒を望むと雖、豈、得べけんや。又、艱難非常の時に臨み、婦女、柔惰淫褻なるときは、夫の名を辱め、夫の家を敗るに至る者も、亦、尠からず。是に於いて、賢女烈婦の傳を輯纂し、天下兒女の讀本とし、以て、貞烈清操を勵まさんと欲せり。先生の如き、實に、活學と謂ふべし。

維新以來、競ひて、歐米の學を採り、務めて、彼の長を師とし、憲章、法度、文藝、學術より、飲食、衣服、蹈舞、歌曲の遊戲に至る迄、皆、彼に據らざるはな

く、進取有爲の氣象、善なりと雖、一方より觀るときは、本邦の國體民情を詳にせず、東西風俗の異別あるを酌量查覈せずして、一概に、泰西の皮相に眩惑沈溺し、新規を爭ひ、舊物を賤しみ、輕薄奔競の習に移り、重厚質美の良性を失はしむる傾向あり。斯の如くなれば、女子が特性なる柔順の美德は、是より、漸く減退し、風俗、遂に頽敗して、舊來、士班に存する眞正の氣節は、夢にだも見ること能はざらしむる不祥を呈すべし。縱、方今の女子は、智識、學藝、兩つながら、昔日の女子より、遙に、數等の上に在りと誇ると雖、品行の良否、婦德の優劣、昔日の女子、復、今日の女子に讓らず。此の時に方り、女子たるもの、幼より、無用の遊技を以て、一身の藝能となさず、書帙を開きて、智識を增し、縫針を習ひて、家政を資くべし。

要するに、内を助くる女子、品行正しからざれば、家政壞亂の基となり、家政壞亂の基は、一國衰頽の根源にして、一國の衰頽は、再、一家の不幸とならん。是、一家と、一國とは、密着の關係あるあればなり。然れば則、其の利害の本源を究め、秩序を追ひて、萬般の事物に應ぜずば、所謂、勞して功なく、畫餠の看を免れざるは、多言を俟ずして明なり。僅に、學政の完全を欲して、枝抄に煩勞する弊なき能はず。然れども、連城の美玉も、少瑾なき能はず。磨瑳して、以て、美名を墜さず。吾人の企望する所は、美玉の少瑾と、枝抄に煩勞する弊は、政府の、之を改良するに吝ならざらんことを。又、深く望む所は、在野の民人たる者、獨、政府の缺典のみを許かず、自巳の精神を擢揮し、巳を省み、巳を責め、各人、自家の幸福を保持する規法を確立せんことを。嗚呼、學ぶに秩序あり。施すに先

後あり。徒に、輕進急遽する者は、却りて、後退の憂を生じ、苗を揠き、助長する者は、却りて、枯槁の害を釀す。何ぞ、父母たる者、女兒の教養を、濫雜にすべけんや。

女子處世論（九）

三輪田眞佐子

第八　婚姻及婚姻の後（つゞき）

さて、良人の家は、必しも、富貴なるが良しとな思ひそ。富貴は風前の燭の如し。いかでか、永く恃むに足らん。唯、家財のあるは、なきに勝るとぞ言ふべかりける。則、良人、苟、賢明ならんには、焉ぞ、異時、富貴ならざるを知らむ。寧、夫婦は、意氣、相投じ、共に勤勞し、與に節儉して、貧賤より、富貴

に進まんとところ樂しけれ。論語に、南容、三復白圭。孔子、以其兄子妻之。とあり。聖人の、女婿を撰ばれしにて、人物を以てせしこと明なり。
女子は、特別の事情あるにあらざれば、自分より、年少の良人を撰ぶべからず。是も、不幸の源なることは、往々、目擊する所なればなり。されど、あまり、年長の者もあしからむ。這は、萬一の秋を思へばなり。亦、强ひて、美男を撰ぶに及ばじ。美貌は、金魚の如く、單に、目を歡ばしむるに過ぎず。是を以てにや、孔子は、宋朝の美を譽められざりき。唯、美にして賢ならば、何をか間然せん。元來、門地の如きは、略、自分と、權衡を得たるものをよしと思ふ。されど、安定胡先生は曰へり。「嫁女、須必勝吾家者。」勝吾家、則女之事人、必欽必戒。と、實に、女子は、慢心し易ければ、此の語は、金言とするに足らざる

も、欽戒の二字は、能く注意すべきことにこそ。

その他、世人は、義子多きはわろし、夫の兄弟姉妹多きはあしからむなどゝ、百類千種の故障を數へんも、これ等は、細末のことなり。古人いへらく、小を忍ばずば、大なる謀亂れん。と、また、忍ぶ所なかるべからず。唯、ことさらに、擇びて、難累を求むるに及ばずとこそ云ふべけれ。されど、おのれ、恒に怪しむ。世人は、姑のなき夫を擇びて、娘を嫁がしめ、もて、愛せりとぞ思ふめるを。そは、彼等は、知れりや。否や。目前の小苦を避けて、將來の大患を釀さんに等しきを。およそ、姑は、多年の經驗を以て、世事に通達すること明なれば、しばしば、姑に呵責せらるれば、實用の智識を授かるものぞかし。

ある人いふやう、老人は、舊を主とし、若者は、新を好むをもて、さながら、秋

風吹きて、落葉翩々たる樹のもとに、時をかへで、菁々たる輭芽を見んことの難きがごとく、姑と、婦とは、到底、意氣、相投せざるものなれば、共にはかりて、團欒の家庭をなさんことは能ふまじと。されど、おのれ思ふに、極端に馳せ易きは、人事の常なるをもて、古を守ると、新を取るとの兩主義を折衷してこそ、始めて、中庸の道に背かざる家風をつくり得るなれ。まして、實驗上より來る智識は、行はんに、誤なきをもて、婦の、姑に從ふは、家運の榮えゆく基ならむ。されば、反りて、姑のある家こそ願はしけれ。但、親戚に、あしきものありて、良人死にし等の不幸に乘して、家財を奪はんとする例さへあれば、家族一門の、道德上人品の高下は撰ぶべきなり。

要するに、苟、良人を撰ばんには、自分と、地位、職分、年齢等、似つかはしき

ものにあらざれば、未來に至り、不幸の起らんも知りがたし。星巖翁に、紅蘭夫人あり。ナポレオンに、ジヨセフインある如きは、似つかはしき例ならし。唯、恐る。今の女子、自分の分限、及、價値を忘れて、文學士、あるは、奏任官など、みづから、思ふまゝの良人を得てしがなと望み、反りて、一生を過るものあらんことを。亦、疾く嫁ぐは、安心ならんと考へ、臍を嚙むも及ぶなき後悔をなさんものあらんことを。

以下、婚姻ののちは、いかに覺悟すべきかにつき、一言をものせん。そも〳〵、女子は、既に、結婚せし上は、貞操の二字を、心に刻み、他心あるまじきこと、いふまでもなきことなり。さりながら、極めて貞操の女子とて、男女の間は、疑ひ、はた、疑はれ易きものなれば、無根の嫌疑たりとも、謹みて招くべからず。

「葦の屋のこやのしのやのしのぶにもいな〱まろは人の妻なり」とぞ、伊勢御は歌ひけるが、誠に、人の妻たるものゝ、忘るべからざる三十あまり一字になん。

いやしくも、夫婦たらんものは、單に、肉體上の關係のみならで、必、精神上の結合なくてやはあるべき。若、精神上の結合なきものは、道德上より見れば、夫婦とするに足らじ。故に、外容のみ、柔順なりとて、內心、温良ならざるものは、夫婦の眞味を知り得ざるべし。儒教に於いても、温良の心を深からしめんためなりけん、女子に、屈從の一事を敎へたりき。世人、その文句を見て、直に、儒敎は、女權あるを認めざるかなと罵るめり。されど、おのれ思へらく、その眞意は、夫婦、相待つべきものにして、決して、女子は、翫弄視すべきものにあらざ

ることを認めけんと。さなくば、いかで、夫婦、室に居るは、人の大倫なりなど、平等の理を敎へん。希はくは、後の漢學を學ばんもの、その語を讀みて、その意をな誤りそ。もし、女子にして、自、謙從を以て、賤劣と思ふものあらば、自暴自棄のものとや言はん。あるは、男子にして、女子を、賤劣なるものなりと言はば、彼、その母を輕蔑するに等しければ、不孝の人とや名けん。おのれ信ずるやう、女子は、天下の母なれば、神聖なるものなり。故に、その責任も、亦重し。例へば、陰の、陽に從ふは、尊卑の故にあらず。天地おのづからの順序なり。女の、男に從ふも、決して、尊卑の別にあらで、亦、おのづからの順序なり。その順序を守るこそ、即、神聖を瀆さゞる所以なれ。この頃、みづから、外國の敎を學び、女權など、いとむづかしきことを唱へつゝ、その抱く見識の、低きに似たる

ものあり。そは、今の女子、多くは、公衆にしめさんための文章、あるは、他人に贈りし片牘に、妾といふ忌はしき自稱を用うるなども、その心術の大方を推しはかり得べき一事なり。元來、妾とは、唐土に於いて、妻の、良人に對し、自遜の心より用うるものなるを、わが君子國の女子にありながら、一般の人にさへ對して用うるは、如何なる心なるか。實に、かゝる文字は、あらずもがな。從ひて、志ある女子たち、まづ、權理など、法律めきたる寒燥無味の新語を歡ばんより、我が國といふ觀念をもて、道德上、高尙なる見識を持ちたまへかし。

茂りあふ木の間のおくに咲く花の
いろゆかしくも見るものかな

史談

中將姫

大町桂月

染井の水はすでに盡きぬ。糸懸櫻もまた枯れぬ。獨り千載に亘て泯滅に歸せざるものは、烈女の芳名なりけり。雲雀山の風雲、永く香魂を弔ふ。紫雲菴の跡をたづねて、袂をしぼらざるもの、幾人かある。あはれ、親、親たるも、子、子たらざるものの多き世に、親、親たらざるも、子、子たる道を守り、人を恨まず、天を咎めず、毅然たる其心、石にあらざれば轉ずべからず、凛然たる其志、席にあらざれば捲くべからず、死を見ること、飴の如く、富貴を見ること、敝履の如く、心事、高潔玲瓏にして世の塵に汚れず、氣節、凛烈淸淑にして巾幗に倫を絶ち、日月も明しとするに足らず、山岳も高しとするに足らず、神州秀靈の氣、鍾つて其一身にありとや云はむ。げに、中將姫の孝烈なるは、大和をとめの本色を代表せるものなり。其境遇の悲壯にして其心事の可憐なるは、天地を動かし、鬼神を泣かしむるに足れり。千載の下、永く無數英雄の淚痕を留むるものは、獨り湊川一片の石のみにあらざるべ

し。

院本の脚色に採られ、小説の主人公に用ゐられて、美談、人口に膾炙し、芳名、三尺の童子にも嘖々せらるゝ中將姫は、奈良時代にながらへし姫君にして、大織冠鎌足の孫、正一位武智麻呂の嫡男、從一位右大臣藤原豊成の息女なり。豊成公、聖武、孝謙、稱德の三朝につかへまつりて、君のおぼえ人にすぐれ、世のきこえめでたく、家も富み榮えて、もち月の、たらはぬ事なき身の上なりしに、初老をこえさせ給ふまで、一人の子種だになかりけり。豊成公、夫人と共に、日夜此事のみなげかれて、長谷寺にまうでゝ、祈願をこめ給ひけるほどに、そのしるしにや、夫人孕み給ひて、花の如き女子を生み給へり。これ、やがて中將姫なり。時は天平十九年、豊成公の御年四十三歳にてぞおはしける。

掌中の玉とめでられて、中將姫三歳になりけるほど、その母君、重き病にかゝりて、心地死ぬべう覺えければ、豊成公と中將姫とを枕元に呼びよせ、さて豊成公に向ひて絶え入るばかりの息をつき、千世までも生きながらへて、かしづきまゐらせむと思ひしを、うたてや、定命のがれがたく、明日をも待たぬ果敢なき露の身とはなり

ぬ。會者定離、生者必滅の世のならひ、さきだつ此身は、今更になげくも甲斐なければ、あとに殘りて憂に沈み給ふ御身の心、如何にかなしくおぼすらむ。是れまでの事は唯一場の夢とあきらめて、千代までもつゝがなくおはしませ。妾のつみは許し給ひて、姫を妾ともおぼしめし、ゆく末かけていつくしみ給ひてよと、いふも涙、聞くも涙なり。夫人また中將姫に向ひて、やよ、おことにきこえるとも、きゝわくべくもあらねど、たゞ心やりにいふぞかし。おこと、生ひたちなば、われに代りて父君を慰めまゐらしてよ。わがなき後は、あらたに母君の來させ給ふべければ、まことの母と思ひて、うやまひ給ふべし。よろづ父母の教を守りて、ゆめ女の道は踏みな違へそ。またをり／＼はわが爲にも後世を弔ひ給ひねとて、姫のうなゐ髮をなづる手さへ、やせ衰へて見る影もなく、桐の一葉もろくも秋風にさきだち、香骨むなしく東岱一片の煙となりぬ。夜と共に、思ひあかして、今朝見れど、煙となりて、消え果にけりとは、豐成公が野邊送りの歸るさ、思ひあまりて、よみ給へる歌とぞ聞えし。

おくれ、さきだつも、いづれ無常の風に誘はるゝ人の身、われもやがてゆくべき道

なれバ、蓮の臺の半座をわけて、心しづかに相待つべしと聞えて、豊成公は朝夕唯姫君をいたはり、後妻をも迎へでおはしけり。かくて姫七歳になりぬ。春の日うららかにてらして百花さき揃ひたる前栽に、空に知られぬ雪ちりて、やり水に佐保姫のおもかげをうつし、ふく風の行方知らせて、とびゆく蝴蝶の影さへ匂ふ彌生の景色に心ひかれて、中將姫は乳母をともなひ、庭の面を逍遙しけるに、膝の童來りて花の枝を手折りければ、下部ども見とがめて聲高くのゝしるに、そゝ父母いで來り、無禮なりと、いたく童を叱りこらしてつれゆきけり。姫、此有樣をつくゞとながめてありけるが、感慨にたへぬおもゝちにて亂母に向ひ、彼の父母の童をつれてゆきたるにて思ひ起しぬ。世の子どもには、皆父母あるに我には、何故に父のみありて、母はなきぞと、ありけるに、乳母涙をおさへ、其母君のみまかりしこと、其遺言の趣など、落ちもなく聞えければ、しバらくは涙にくれておはしけるが、思ひ付きたることやありけむ。やがて父君の側にはしりゆき、いま乳母に聞きて、はじめて妾の身の上を知り侍りぬ。子に母なきバかりなげかはしきことはあらじ。まことの母のごと、つかへ侍らむに、妾をかなしくおぼさせ、あらたに母君をもたせ給ひ

てよと、勸むるをさな心の殊勝なるに感じ給ひ、一族の人々にかたらひけるに、いづれも勸めてやまざるにもだし難くて豐成公もうべなひ給ひ、橘の諸房卿の息女をぞ後妻には迎へ給ひける。

繼母にはつゝしみて事ふるものから、なき母のことも忘れがたくて、其後世を弔はむとおぼしめし、父に告げて高僧を家に招き、稱讚淨土經を讀み覺え、亡母のためとて、日々誦經に餘念なく、また時をたがへず墓にまうでゝ、手向くる花もつねに露けかりけり。げに、時に感じては、花に涙を灑ぎ、別をいたみては鳥に心を驚かさるゝならひ、蟲の聲にやせはそりて、萬木霜に枯れたる冬の曉、松の木ひとり緑の色をかへずして、西ふく風に調べを合はする物寂しさに、まれに來て、問ふもさびしき松風を、常にや苔の下にきくらむと、よみいでたまへる。孝兒の心根、思ひやるだにあはれなり。

かくて、姫、十三歳になりぬ。玉の肌、氷の骨、窈窕たる姿は花も色なく、鮮妍たるかんばせは月も光を失ふばかり、いとらうたけて、類稀なる美人なるに、心ばへさへ優美にして、女の德一としてそなはらざることなく才智人にすぐれ、糸竹の道

に至るまで堪能にして、世のきこえ、いとめでたく、後日后姫にたち給はむものは、此姫君を措て他にあらじと、云ひあひけるほどに、いつしか上聞に達し、後宮にめされて、藤中將とぞ申しける。中將姫といふことは、これより起れるなりけり。君命かしこくて、いなみ難ければ、宮仕へするものから、固より榮耀を好む心なければ、時々參內せらるゝのみにて、多くは內住みにてぞおはしける、繼室も始のほどこそ姫をいたはりけれ。其位高く、容貌才德すべて己にまさりて、世のきこえめでたきを聞くにつけ、見るにつけ、ねたましさいやまして、とりあつかふこと、あらあらしく、せめ苦しむこと、一方ならずなりぬ。されど、姫、少しも恨むる氣色なく、うやまひつかふること、前に異ならざりけり。

かくまで孝心深き姫君なるに、さても、繼室の心は鬼か、蛇か。ねたみやう／＼つのりて、豐成公に讒しけるやう、今まではもだしたれど、一人の手を以て、萬人の口をふさぎ難ければ申すなり。中將姫、うはべはしとやかに見ゆれど、人の心ばかり測り難きものはあらじ。先のほどより姫の局へ忍び來るものあり。このまゝにさし置きなば、一家の恥辱となりなむ。心させ給へと云ひければ、姫には、よもさる

事はあらじ。
一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふる世のならひ、人の言葉など、みだりに信じ給ひぞといふ。さらば、其証を見たまへとて、かねて工み置きたることなれば、ある朝まだき、豊成公をそゝのかして、籬の此方に身をひそめて窺ふに、局の側より出づる男あり。顔はつゝみたれば、誰ともわくよしもあらねど、烏帽子歪み、直衣しはたれて、あわたゞしく出でゆくさま、忍び男にまがふべくもあらねば、豊成公大に怒り給ひ、さては、人の噂もまことなりけり。一門の名折れ、やはか此儘におくべきとて、刀の鯉口くつろげ、殺氣を含みて姫の局へゆかむとし給ふを、繼室はおしなだめ、御身手を下し給ひては、世のきこえも如何なれば、たゞ妾に任し給へ。よきにはからひ侍るべしといふに、豊成公も否みがたく、さらば御身に任さむとて、抜きかけたる刀を怒と共に鞘に納め給へり。
繼室ははかりおふせたりと竊に喜び、やがて、川熊の嘉藤太とよぶ強剛の野武士を招きよせ、館の君の命なれば、姫を人知れぬ深山につれゆきて斬殺し、死體は深くかくし置き、しるしばかりの物を持ち來り我に示せよ。さらば、君に聞えて、官祿

を得さすべくといふ。慾に目のなき野武士なれば、深くも其わけを問はず、直ちに承諾しければ、姫には、父の怒り甚しければ、しばらく家を去り給へ。折を見て父を宥めて、御身を呼び戻すべしときこゆ、板張輿に載せて、しのびやかに館より出だしたり。ゆき〳〵て紀伊國、有田郡、雲雀山につきぬ。玆に嘉藤太は輿を舁ぎ來れる下部どもをかへしやり、さて中將姫に向ひ、何の故かは知らねど、御母君より御身を斬りて來よとの仰せをうけて、此處まで伴ひまつりぬ。見れば、御年若く、いとらうたき御姿なるに、そも、如何なる罪を犯して、此憂目には遭ひ給へるぞと問へば、われ朝夕誦經の外、更に他事なし。たゞ今の母は繼母にして、いたく、我をねたみ給へば、事、皆母の胸中より出でたりと覺ゆ。是れすべて、前世の因果なれば、父母を恨むべきにあらず。われすでに、覺悟を定めたれば、仰の如くわれをきり、首をば上衣につゝみて父上に奉るべし。中なる小袖は汝に取らすなり。下なる衣には、わが屍をつゝみて、谷底に沈めよ。われ、毎日淨土經六卷を讀むことを常とせり、今日を限りと思へば、例のごと、讀終りて、こゝろやすく、死なむと思ふなり。讀み終らば、西に向ひ、合掌して佛名を唱へんに、其をあひづとしてわれを

斷るべしとて、經とりいでゝ讀み給ふ。嬌喉宛轉、珠玉盤に走る、伽陵頻迦の聲もかくやと疑はれ、空ゆく雲もとゞまるばかりなり。父上の現當安樂の爲とて、一卷を讀み了へぬ。又、亡母の後世安樂の爲とて、今一卷を讀み了へぬ。又、母上と共に、一蓮托生せむ爲とて、今一卷を讀み了へぬ。讀み終はることゝ、是に於て、三卷。顧みれば、日影已に西に斜なり。望む所最早なければ、殘る經卷は讀まで止みなむ。唯速に我を斬るべしと促し給へば、さしもに猛き嘉藤太も、鬼の如き目に淚をはら〳〵とながし、許させ給へ、姫君。われあらき業を好みて、人を殺せしこと幾人といふことを知らず。されど、姫君の淸き御姿、淸き御心、唯現世の活菩薩とのみ思はれて、猛き心もよわり、刀もつ手もしびれぬ。あはれ、かゝる尊き姫君を助けまゐらせなむ、是迄人を殺せし罪障を亡ぼす端ともならむ。されど、このまゝに助けまゐらせては、御母君の疑を解くよしもあらねば、御上衣を賜はり、わが股を傷げ、其血もて上衣を染めて、御身を斬りたりと偽らば、母君必ず眞と思ひ給はむ。されば、探し出さるゝ事なくして、後安かるべし。我身にまかし給へと乞うて止まねば、姫、惜しからぬ命なれど、冥途を急ぐ事もなければ、請はるゝまゝに許

しつ。其夜一夜、姫は輿の中にて明し給へり。嘉藤太は上衣を携へて舘に歸り、かくと告げゝれど、繼母大に喜び、當座の褒美を取らせ、なほ追つて夫に薦めて官祿を得さすべしとて歸しければ、嘉藤太は其妻と共に、翌朝早く、雲雀山に赴き、夫婦ともに、いとまめ〳〵しくかしづきけり。

深山幽谷の奥にて、人跡だになければ、家らしきものゝあるべきやうもなし。木を伐りて柱となし、枝を束ねて壁となし、枯葉を葺きて屋根となし、いとあやしげなる家のやうのものを作りて住へども、月さへ洩れて雨露をしのぐに足らず。いたはしや、金殿玉樓に人となりて、あらき風にもあたり給はざりし姫君、念佛三昧に朝夕を送りて犯せる罪なきも、繼母が邪見の毒舌に清淨無垢の身を汚されて、あらぬ浮名を被り、經卷の外にはもたる物もなく、人も通はぬ山奥に、麋鹿を友とし、風に櫛り、雨に浴し、嘉藤太が村里にいでゝ、熊野詣の旅人に物乞ひて得たる錢に、其妻が澤にゆきて摘みたる芹、林に入りて拾へる木の實などにて露の命をつなげるつらさ、苦しさ、心細さ、思ひやるだに、身にしみて、涕涙の逆るを覺えず。かゝる境遇に處して身をかこたず、人を恨まず、悠然として天を樂しみし心ばへに至り

て、日、前を空しうし、後を絶ち、斷じて古今絶無の烈女なりと絶叫せんとするなり。

明る年の春、嘉藤太病にかゝりて、果敢なくなりぬ。頼む木影に雨洩る心地して、愁傷言はむかたなけれど、殤哭の聲また死人の永眠をさますによしなければ、なく〳〵亡骸を小屋の傍に斂めて、ねもごろに、後世を吊ひ給へり。山中に暦日なく、溪氷の解くるを見て春の來るを知り、木葉の落つるを見て秋の盡くるを知るほどに、三年の春秋をぞ經にける。豊成公、一時は夫人の手前を耻ぢて、中將姫を手打にせむとし給ひたれども、固より殺さむと欲する心なかりしかど、夫人のとゞむるを機會にしてやめ給へり。後、夫人の姫を殺害せしめたることを聞きて、事の意外なるに驚き給へども、また如何ともすることも能はず。其身の子に縁なき故とあきらめ給へども、さすがに、恩愛の情忘れがたく、他所の童女の樂しく遊ぶを見るも、ひとへに涙の種とぞなりける。思ひわびさせ給ふあまり、心を慰むることもやとて、閑ある毎に、野外にかりくらしてぞ餘命を保たれける。或日、雲雀山のあたりには、獲物多しと聞き、山ふかくわけ入り給ふに、怪しげなる廬の中に住へる二人の女あり。野狐の變化にやとて、近よりてつく〴〵と見給へば、まか

ふべくもあらぬ中將姫なりけり。父よ、姫よと抱き合ひ、姫は、繼母の讒によりて浮名を被り、此山中にて殺されむとせしを、嘉藤太夫婦の情によりて、今日までながら給へることを語りいづれば、父は、繼母の言を信と思ひて、よきに取りはからはむことを任かせけるに、意外にも、無殘にも、姫を殺しきと聞きて、悲しさやるかたなく、今日まで樂しからぬ月日を送れりなど聞え給ふに、思あまりて、言葉足らず。胸中無量の感慨をぞ、眼々に溢るゝ涙ぞ語り合ひける。

豊成公、中將姫と嘉藤太の妻とを伴ひて歸り給ふに、此事早くも都へ聞えければ、繼母は早くも跡をかくして、何處ともしらず去りにけり。げにや、汝に出づるものは汝にかへる。天道の是非また疑ふべくもあらぬなり。世に無慈悲なる繼母多しといへども、中將姫の繼母の如く、殘忍酷惡なるものは稀なり。世に孝女多しといへども、中將姫の如く、孝烈なるものは、またとはあらざるべし。此孝女にして此繼母に逢ひ、繼母の惡ます〳〵甚しくして、孝女の孝ます〳〵あらはる。猶は松柏の嚴寒に遇うて、晩凋の節あらはるゝが如し。また盤根錯節にあうて、利器の利あらはるゝが如し。されば、世のきこえ前にましてめでたく、容貌才德、世にならぶものなけれ

ば、必ず后妃に立てらるべしと、頻りに風聞せり。中將姫は年頃の辛苦に浮世の果敢なきを觀じ、富貴の浮べる雲にひとしきを悟り、厭離穢土の情盛にして欣求淨土の心切なれど、后妃の尊も今は何かはせむとて、竊に忍び出でゝ當麻寺に至り、實雅といふ名僧を戒師と頼みて、翠の黒髪をおろし給ふ。時に、天平寶字七年六月十五日、御年わづかに十七とぞ聞えし。

豐成公初めは惜しみ給ひたれど、姫の心のかたきを見て、とゞめ給はず。寺の側にさゝやかなる菴をしつらはせ給ふ。此菴を紫雲菴とぞ呼びける。姫の戒名、始めは受善心比丘尼と云ひしが、後、法如と改め、朝夕を行ひすましてぞおはしける。翌年、淨土經十卷を寫して、開題供養を遂げられ、如來の影向を拜して、蓮莖を衣に織り成せるなど、佛教信者に取りては、隨喜の涙の種なるべし。染井とは、其つむぎたる糸を洗へる處、糸懸櫻とは其糸をかけし處とて、其名後の世までもしるし。かくて、中將姫、寺におはせしこと十四年、二十九歳を一期として、眠るが如くみまかり給ひぬ。時に寶龜六年四月十六日、晩櫻ちりはてゝ、橘香る夕まぐれ、血を吐く杜宇の忍音、雲井の空に名乘るもあはれやな。

嗚呼、中將姫、佛經に依りて安心立命の地を得て、以て能く道を守り給へるものから、心ばへの優美にして、しかもをゝしき、げに大和をとめの本色なりけり。死に臨んで恐れざる勇烈は、鬚眉の男子にも稀なるべく、富貴を脱棄して、高蹈、天を樂しむの心事は、名利の奴隷たる僞豪傑の輩をして慙死せしむるに足れり。其曼陀羅の如きは、佛教に通せざるものゝ說き得べきにあらず。唯姫の心事の玲瓏なるは、蓮花の外また比すべきものなし。淤泥の中に生じて濁に染まざる蓮の花、繼母の嫉を受けて正道を守る中將姫の心、其花既に美なり、其心は更に美なるを見る。葉上の露を玉と欺くも、蓮は心あるにあらず。あはれ、玉の露か、露の玉か、記し來て、欽慕の淚、玉となり、露となりて、紙上に聲あるを覺ゆるのみ。

木村重成の室　　貫堂散史

こは、誰人も、夙に、聞知れる事にて、今、更に、物すべくもあらぬことながら、猶、其の雄々しき操の、慕はしくて、已み難かりけれど、こゝに、本誌の餘白を借ることゝはなしぬ。

木村長門守重成の妻は、眞野豊後守頼包の女なり、嫁せしより、深く長門守の愛する所となりしが、大坂の事破て、豊臣氏の亡びんとする時、長門守食せずして、且、憂る容ありけるに眞野氏性、頗、聰慧にて、疾く、其の當時の動靜を知り、長門守に謂つて曰はく、君か去年今福の一戰は、何ぞ關東五十余萬の師に恕ちんや、然れども、渝へ易すきは心にして、果し難きは死なり、死ぬべき時に死せざれば、其の羞死よりも甚し、君の食し給はざるは妾の解し難き所なりと、長門守笑ひて曰はく、五穀胃に入れど、二十四時を經て消すと、吾因りて穢き物を斥けて潔き心を出さんのみと、眞野氏之を聞きゝて、欣然として退き、乃心に思事どもを書き記して、寢室に入りて死したり、時に年十八なりとぞ、

何、眞野氏が長門守に死を諷せし書なりとて、世に傳ふるものは、左の如し。

一樹酒蔭一河の流、是他生の緣と承り候にてぞ、そもおとゝせの比よりして、偕老の枕をなして、只影の形に添ふがごとく、思ひ參せ候、此頃承り候へど、此世限の御催のよし、かげながら嬉くまゐらせ候、唐の項王とやらむ、世に猛き武士なれど、虞氏の爲の名殘を惜み、木曾義仲は、松殿の局に別れをとやら、され

を、世に望み窮たる妾が身にては、せめて御身御存生の中に最後を致し死出の道とやらひにて奉待上候必々秀頼公多年海山の鴻恩、御忘却なき樣頼上まゐらせ候、荒々めで度かしく、

長門守重成樣　妻より

學園

詠歌の教授法（上）

目黑和三郎

近來、詠歌の道、大に開けて、新聞、雜誌など、おほかた、和歌をのせぬものなきに至れり。さるは、この四五年以來、國語の發達に伴はれて、諸學校にて、この道を教ふるもの多くなりたればなるべし。されども、この學を教授する者の、この道の教授法につきて論へるものありしを見ず。今、おのれは、この教授法の事につきて、古人のいへることをくみとり、おのが愚見をも加へて、おもふよしを、いさゝか述べんとす。もとより、人のいはぬことゝ、おのれうちいでゝ、大方のは

まれ得んとの野心にはあらで、偏に、この道の進歩を謀る微衷に外ならず。見ん人、をことな咎め給ひそ。(但、こゝに斷りおくべき事あり。そは、詠歌の敎授法とは、初學の、和歌をよまんとするに、如何にせば、早くよみ得べからんやうなるべきか。その手續をいへるにて、所謂、歌よみの方に屬し、歌學者の部には入らぬなり。)

古より、名高きうたよみ等が、歌のよみ方につきて、工夫を下せる種々の方案あり。定家卿は、「歌をよむには、先、心をすますが第一にて、日頃、我が心に、おもしろしと思ひ得たらん詩にても、歌にても、心におきて、それを、力によむべし。」とて、白樂天の、故郷有母秋風涙。旅館無人暮雨魂。といへる句、又は、蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。などいへるを吟じて、よむことを常とし、定家の父俊成卿は、深夜、燈火かすかにそむけて、桐火桶に、ひぢ打ちかけ、唯、ひとり、物靜に考ふるを例とし、人に向ひても、しめやかに案じてよめと敎へたりとぞ。又、この卿の女は、兼ねて、もろ〳〵の集どもくりかへし、おもふばかり見畢へぬれど、皆、とりおきて、火かすかにともし、人音なくしてよみ、宮内卿は、始終、草子、卷物とり

ひろげ、かきつけ〳〵、晝夜の別なく考へたりといへり。又、爲世卿は、はれの歌よまむとては、常に、法輪にまゐり給ひ、若きものども、こゝに來りてよむべし。所がらのすごさも、ことに、歌、よく出でくるものぞといひ、頓阿も、道の佳境に入り、絶妙の秀歌をも讀まんと思はゞ、三昧に入るが如く、心を、面影の幽なる所に留めて、人のふるさぬ所を案ずべし。たやすく出來がたけれど、沈思せずもあるべからずといへり。近來、風躰に、道を、深く執心する人は、三昧に入るが如く、心をしづめて、幽玄の境に入りて、ふるさぬ所を案ずべしといへるも、亦、同じ意なり。

此等、みな、歌よむ事につきての方法なれど、妙巧の地位にたちて、芳を、千載に競はんとするものゝ所爲なり。かゝる際の事は、和歌一首を、廿日づゝもかゝりて案じたりといへる紀貫之に駕し、一首の和歌に、五年の生命を縮めし頼實にも倣はんと欲するが如き心搆の者の上の事なれど、初學の者の、えまなぶべきに非ず。況、また、今の時代の、學術、藝能、ことわざしげきに當りて、兒童に訓ふる方法となすに於いてをや。

祝部行氏、若かりし時、草子などみて、歌よまれしを、忠成の、見て、歌は、青雲

に向ひてよむべし。今より、古歌にかゝりては、美しき歌よみには、なる事難しといへるも、以上のたぐひなり。「井蛙抄に、民部卿入道申されしは、歌をば、一橋をわたる樣によむべし。左へも、右へも、おちぬ樣に斟酌すべきなり。心のまゝによむべからず。」とあるも、歌よむ者の爲に、一の心得とはなりぬべけれど、未、初學者の方法と爲すには足らず。「又、被申しは、塔をくむやうによむ。塔は、上よりくむ事なし。地盤よりくみあぐるやうに、下句よりよむ也云々。」此は、二條家のならひにて、定家も、この法を用ゐたりとぞ。その故は、上の句よりよみ下るほどに、末よわになるものなれば、下の七々の句を、先、思ひしたゝめて後、第二句よりよみて、をはりに、初五文字を、本すゑにかなふやうにおかん爲なり。此等は、初學の一法と爲すにも足りなんか。然れども、此は、當時、歌合の流弊にて、今日、多くの生徒に教ふる方法とはなし難し。爲家卿の稽古には、戀歌をよむべしといへるも、今の世には適はざらん。この他、何といひ、角といひ、彼の新撰髄脳流の書籍をあさりなば、種々の方法もあれど、皆、今世に適用し難きものゝみなれど、悉、これを省きて、おのが心に適へるものを、左に掲げん。

有賀長伯曰はく、(和歌八重垣一)

初心の時は、歌學なくとも、先、何にても、題を得て、俗言俗態のたどりなく、口にまかせて、つらね習ふべし。さて、道を心得たる人に見せて、批判を受くべし。凡、歌學と、讀かたとは、かはりあり。すべて、學問の力にて、よみかたは知れぬ物也。讀かたと云は、歌のよみ叶へやう也。一首〳〵の上にて、それ〳〵のよみかたあれど、歌書をみたる力にては知がたし。先、讀うたにもとづきて、人にも尋ね聞などすれば、讀かたの格式もしり、又、歌よまんとては、おのづから、少々の歌書をも見て、大躰の事は知もの也。さて、歌に口なれて後の學文也云云。

この條は、先に斷りたるよみかたと、歌學との分別につきて、もはら、言を立てたるものなれども、口に任せて、つらね習ふべしといへるくだりは、實に、今世に適用すべき事と思はる。

又、本居宣長翁曰はく、(玉勝間十一うひ學びの輩の歌よむさまの條)

うひまなびのほどは、おほかた、題をとりぬれば、まづ、昔のよき歌の集の中の、

その題の歌どもを見て、その中の一つによりて、こゝかしこ、すこしづゝ、詞をかへて、つゞりなすならひなるを、大かた、古人のよき歌は、其詞、皆、必、さかいはでは叶はぬさまにて、大方、一文字もかへ難きものなるを、いまだしきもの、心もしらず、こゝかしこをかへぬれバ、かへたる所の、必、とゝのはぬわざなる故に、歌、よく心得たる人の見て、そを調ふさまに引なほせども、必、又、本の古歌とひとしくはなる也。扨、さやうに、古歌を、專、同じくては、新によめる甲斐なきやうなれども、初學のほどは、後までよめる歌數に入べきにもあらざれバ、それは、とても、かくてもありぬべし。歌のさま心得んまなびの爲には、暫く、たゞ、おいらかにて、上の件のごと、まねたらんぞよかるべき。さるを、はじめより、さかしだちて、人のふるさぬめづらしきふしをよまんとせむ、中々に、横さまなるあしき道にぞ、まどひいりぬべき。

此も、初學の輩の、古人の句をぬすみかへてよめるならはしを、惡しとには非ずと定められたるものにて、教授の方法とは云ひがたけれども、初學のほどは、たゞ、おいらかに、古人の歌をかへ用ゐて、歌のさま心得よといはれたる、この精神を酌み

とりて、教授の方法の主となすべきなり。

又、春庭翁曰はく、（詞通路下）

さて、歌をよみならはんと思ふ輩は、まづ、初の程は、てにをはの書、又、詞の書などは、しばらく、さし置てよむべからず。又、歌よまんに、てにをは、詞づかひなど、むげにしらざらむは、いかゞと思ふは、中々に、ひが事也。歌は、とかく、何事も、一向にしらざるほどより、よみならひものするが、もともよろしき也。初より、右等の書を見て、なまじひに、事をしりては、さかしら心いで來、又、てにをは、詞さまなどにからめられ、言葉すくみて、のびらかならず。心に、まどひいで來て、中々に、よろしからざるわざ也。只、初は、題林愚抄、草庵集、此二の書を、手本として、よみ習ふべき也云々。

すべて、歌は、數多くよみいづるか第一なれど、とかく、その意にて、隨分、澤山によむべき事なり。はじめのほど、多くよまざれど、詞のびやかならず、口はどけ難し。かくて、師の許に、自、物して、添削をこひ、何にても、知らざる事はとひきゝ、聊なる事をも、いかゞと思はん事は、必、尋ね明らむべし云々。

翁の言は、最、くはしく、最、親切に説き示されて、初學の輩は、この言に遵據すべき事とぞ思はるゝ。但、題林愚抄と、草庵集とを、殊更に撰み出でられたるに就きて、いさゝか思ふふしあれど、そは、後に云ふべし。

野之口隆正曰はく、(歌學入門)

歌のよみはじめには、數多くよむべし。人にきかせてわかるやうに、きこゆる樣にと、こゝろがけてよむべし。趣向と、詞とは、近き頃の上手の歌にならふべし。紅塵集、草野集のたぐひ、すべて、近きころの人の歌を、おほくよみて見るべし。近き頃の上手は、わかるやうに、聞ゆるやうによみたるものなれば、ならひやすし。近き頃の歌ばかり見るも、よろしからず。古今集をまじへよむべし。古今集をよむには、しひて、歌の心を解かんとせず、只、そのしらべに、心をつけて、つゞけがら、いひまはしの、すら〳〵と、とゞこほりなきを見て、それに習ふべし。くりかへし〳〵よむべし。常に、その口調になれてをれば、自、おのがよむ歌のしらべ、それにうつりて宜しくなるなり。

漫録

あらずもがな（第八）

鹽井雨江

（十七）女子の痛く酒を飲むは、やがて、男子をも呑むらむとおぼえて、恐ろしく人心地もせず、わらずもがななり。女は、常に小萩の花の露を含みたらむむかり、柔しく美しかるべき顔を、鶏頭といふ草の、憎くさげに、ひた朱きに朱きはぜの面と成り、玉とやらむいひて、清く涼しく、めでたかるべき肌を、焼野の瓦石の、光りもゆかしさもなく、ひた赤きに赤きむかりの肌と成りさては、畫にかける章魚といふ魚のやう踊りたはむれ、糸にかゝりし鰕といふ魚のやうとびつはねつ興がるはぜにても、醜く卑しく、下等動物と見えて、女子とはいかでかおぼえむ。

ましてや、翠の黒髪のけ亂れて、面にかゝるをも搆はず、黄なる聲高らかに、天地に罵りながら、飲めるやうなりては、男子をば更なり、鬼神をも呑むらむとおぼえて。畫にかける赤鬼よりものすごく、草紙に記したる夜叉よりもすさまじうおぼゆ。

わきて、子もてる母の、酒好みて飲める、家庭の教へは如何ならむ。何を以て、我子を養育せむするにかゝわる。唯に、靜に飲むのみならず、餘念なげに手習へる子を呼び立て、或は、ものまとやか

に裁縫ひせる女子を呼び立て、納戸へ行きて、酒を持て來よ、疾く〳〵せよ、疾くせずやなどいひたる、母たる聲とは、いかでか聽えむ。此の世の聲ともおぼえず。あらずもがな、聽こえずもがな。

(十八)女子の海水浴に行くは、危く心もとなく、あらずもがななり。そは、打ち寄する浪の強さを恐れてにあらず、荒磯淵の庭深さを危みてにあらず、岸のさゝれの多きを怖れてにあらず、沖のいはほの險しきを思ひてにあらず、唯、おのれが危く心もとなく思ふ所以は、浪にあらず、淵にあらず、岸にあらず、巖にあらず、唯、海水浴場邊、浮萍の漫々たるに、あへなく淑女の誘はれむ事を恐れてなり。又、惡風毒流の渺茫たるに、令孃たちの情なく溺れむ事を恐れてなり。

あはれ、神州の眞女子。夏の暑さを厭はゞ、身邊の涼しきを思はゞ、唯、朝夕たらちねの敎の庭を踏み、父母の恵みの床に靜坐して、聖賢の德風に心を淸め、古の孝女貞婦節女義婦と語るべき。さては、大磯の海水にくゝらずとも、鎌倉の浦わに遊ばずとも、都大路の汚き塵中に起臥して、心自ら涼しく、身又自ら閑なるべし。

(十九)世に二七といひ二八といふ、年若き女子の、子供もちたるは、撫子といふ柔しき花に、毛虫といふ恐ろしき虫のつきたるより、くちをしく無念憎くさげなり。さばかりの年齒、既に〳〵子供を有つべき身心整ひてか。かばかりの春秋、はやも子供を養育するの道を知り盡くしてか。いかに。

われ〳〵人間といふもの、年を重ね月を積むまゝ、形に心に具はりゆくなるは、産兒のこゝと泣くばかりなりけるが、骨かたく丈のびるにつれ、這ふをおぼえ、立つを知り、さては、歩むを習ひ、ものいふすべを知り、もの思ふやう成りゆきて、いつしか、體も心も大かた具りて、大人と成るさまを見ても知れなむ。初めより、這ふと、立つと、語ると、思ふと、一時に大人しき嬰兒といふは、未だ知らず遂に聽かず。さる者あらば、それや世にいふ變怪。

げに、人は産兒、嬰兒、童、青童、丁年。體に心に、年月を積みて、大人と成る者。さながら、樹木の二葉より幹のび枝しげり、樹木の形具はりて、さて、花さき實を結ぶやうなるに似たらむ。幹と枝と花と實と、一時に草木と成るものはあらじ。さる草木あらば、そも怪草妖木といはむのみ。木は、三歳四歳わかきも、五歳六歳ふるきも、同じく花さき實を結びぬ。されど、おなじ樹木とて、わかきのは、花の色も香も薄くしぼみやすく、わきてや實、わかきのは熟し難く落ち易く、總じてわかきのは劣れり。年月の少く、樹の熟せざるが故なり。

人も又かゝれり。二七や二八や、人といふ形したれど、なほ身體の熟さず、精神の足らぬ所多かり。されば、さばかりの人の子は、わかき木の花なり實なり。しぼみやすく、熟し難く、生長思ふやうならず。教育も慥かならず。かゝる子供にか、痴者も數多、病者も多く、總じて君の爲め國の爲め、

やくなき用なき不具者多き。こは親たる人の、體に心に、未熟の所あるが故のみ。こを思へば、早婚する者は國家の賊臣亂民。それ許す父母も同罪。

女子の負ふべき大任（中）

大町芳衛

古今を歴觀するに、賢父の子の必ずしも賢ならざれども、賢母の子は必ず賢なりと、息軒翁のものせるは、吾人最も其切なるを感じて措かざる所なり。試に見よ、聖賢の泰斗たる堯の子、丹朱は不肖なりしにあらずや。堯と並稱せらるゝ聖人舜の子、商均も亦不肖なりしにあらずや。六國を打ちて一丸となしたる始皇帝の子、胡亥は鹿と馬とを辨ずる力なかりしにあらずや。六十六州の總追捕使たりし頼朝の子、頼家、實朝竟に父業を紹ぐ才なく、桂奴より起り、六十六州を席捲して餘威、四百餘州を震動せし秀吉の子、秀頼また群雄を統御する器なかりしが如き、皆これ賢父の子必ずしも賢ならざる著明の例なり。又見よ、太姜の賢にして王季ありしにあらずや。太任の賢にして文王ありしにあらずや。太似の賢にして武王、周公ありしにあらずや。正成の妻にして正行あり、瓜生の母にして保、義鑑、源琳、重、照ありしが如き、皆これ賢母の子必ず賢なる著明の例なり。劉向が母儀傳の小序にいはく、惟れかくの如き母儀賢聖にして智あり。行ひて儀表となり、言へば則ち義に中る。子孫を胎養し、漸を以て敎化す。既

に成すに徳を以てし、其功業を致す。姑母此を察せバ、法らざるべからずと。母儀の美、賛し得て盡せり。殊に其胎養の二字の如きは、女子の任務に尤も剴切なるを見る。誰かいふ、腹はかりものなりと知らずや。種子如何に善良なるも、磽确の地にまけバ、其發生の不完然なることを。

王侯將相、固より種あるにあらず。劉景竹の子の豚犬なりしは、また怪しむに足らざるなり。兵馬倥偬の際、武士常に矢石の間に起臥するに當りては、其子の教育一に母の手にあり。太平の世といへども、夫は外につくすものなれど、幼兒の日夕親昵して、冥々の間に感化せらるゝものは其母なり。母の教育主として第二の天性を作るなり。世人動もすればいふ、愚なる乳母の乳を呑めど、其子愚になると。眞に然り。されど、其乳を呑むが故に、愚になるにはあらず。日夜親しく之に接して、其言語擧動に感染するが故に、知らず〱愚化するなり。若し愚なる乳母の乳を呑んで愚となるものならば、愚なる乳母よりも更に愚なる牛の乳を呑まば、其子、人間の性を失ひ、呱々の聲變じて牟々の聲となるべき筈なり。世豈かゝる理あらんや。乳兒の賢愚は、乳母の人となりの如何に在て、其乳の如何にはあらざるなり。乳母且つ然り。況んや母たるものに於てをや。然るに、人士の妻を娶るや、往々才德の如何を問はずして、先づ容貌の如何を問ふ。甚しきは、容貌の美を求むるに急にして、また何の處の馬骨なるかを顧みるに遑なきものあり。此の如きは、吾人實に論ずる

に忍びず。妻たるものも、亦兒童の管理を乳母若くは侍女に一任し去りて、自家の閑日月を歌舞管絃に寄するものなきにあらず。吾人竊に國家の爲に、大息に堪へざるなり。

家庭教育の主任者たる婦人の職を、平易にいへば、兒童を陶冶するにあるなり。而して今の兒童は未來の社會を組織する分子なれば、婦人は兒童を生むと同時に未來の社會を生み出すものなり。

世界の大勢、文化日に増す、國事益繁く、優勝劣敗の狀態、益切迫せむとす。未來の社會に處するは、現在の社會に處するよりも猶は難し。文明史上、猶は未だ幼遲なる邦國に在ては、殊に其然るを感ず。されば未來の社會を經營する多數の婦人も、現今の社會を統治する宰相とは、其任の大小、未だ容易に判すべからざるなり。

白樂天の詩に、人生莫作婦人身、百年苦樂由他人、とある如く、女子の身を消極的に觀察すれば、まことに果敢なきものならむ。されど、未來の社會を經營する大任は、女子自から奮うて之を負はざるべからず。卿等幸に國家の爲に自愛せよ。卿等の前途は多望なり。卿等の爲すべきこと、極めて多く、徒に秋扇を咏じ、落花をながめて、紅閨の中に醉生夢死すべきにあらざるなり。

理論上より見るも、習慣上より見るも、女子は實に未來の社會を統治する有力者にして、責任至つて重ければ、隨て、亦大に覺悟する所なかるべからず。鎌倉右大臣の歌にも、物言はぬ、四方のけだもの、すらだにも、あはれなるかな、親の子を

思ふを云へり。況んや、人に於てをや。されど、人の親の、心はやみに、あらねども、子を思ふ道に、迷ひぬるかなと兼輔の言へるが如く、子を愛するあまり、知らず／＼未來の社會を作り出す大任を遺るゝもの、比々皆然り。子を愛して、教へざるたかり、親甲斐なきものはあらじ。佛を造て魂を入れざるは、吾人、未だ其可なるを見ざるなり。

南洲翁の詩にいはずや、幾經辛酸志始堅、丈夫玉碎恥瓦全、我家遺法人知否、不爲兒孫買美田と。試に問ふ、世間の母にして、能く此意を服膺するもの、其れ幾人かある。また問ふ、愛する子は旅せしめよとの警語をば、如何に聞きたまふや。柔婉淑優は實に女子の最大美德なり。吾人は、日本女子の特性として、之を世界に誇らむとす。赤染衛門が、風いたう吹きし日、其娘のものに詣でしに、風まだに、あてじとこそは、思ひしを、ふくにさはらで、行くが悲しきと、よみけるは、げに女性の至情なるべし。されど、虎の子を生みて、三日にして、之を千仭の谷底に投ずるは、なか／＼に、子を愛する所以なることを悟らざるべからず。子を愛するの要を、消極的に斷言すれど、愛に溺れざるにあるなり。未來の社會を經營せむと欲せば、未來の趨勢を達觀する識量なかるべからず。憐れむべし、親たるもの、子をして路頭に物乞はしむる爲とて、玉琴は教へざりしものを。

徒然草を讀みて兼好法師を思ふ

横井絲萬多

世は刈薦の如くかき亂れて、天下道なく、朝廷は南北にわかれて、わりとある人、皆たつきにまとへる中に、雙が岡にこもりゐ、しらず顔にて、つれ〴〵なるあまりにや、日くらし硯に向ひて、思ふまゝにかきちらしけむ法師こそ心にくけれ、さるは其性を水莖のあとにあらはれし中に、人の情をいひ、物のことわりをときたる、げにと思はるるふし少なからざるに、唐土の何かしかいひけむあとをふみて、傳へてきゝ學びて知るはまことの智にあらず、などいひけむは、今の世より見れど、いかにぞや傾ふかるゝのみならず、あまり鸚鵡のやうなるが口をしきを、そも世にいふさとりの學を傳へたりともいふべくやなど思へる内に、驥をまなぶは驥のたぐゐ、舜をまなぶは舜の徒なり、僞りても賢をまなべむを賢といふべし、などいましめたるがありて、さきの言葉の心とたがひたるにか、はたいとふかき心をたどらしむるにやと、おぼえしむるもいとゆかし、かにかくに、たゞ何となく書ながしけむことの葉も、とり〴〵にさとりふかゝらぬはなく、人の戒ぐさならぬはなく、中にもかゝる世にありながら、帝の御位はいともかしこしと、帝の犯すべからざるを、ことによせて何けなくいひはなちたるは、いみじともいみじく、げにいかにいひすてたることぐさも、みないみじくきこゆるを、などこの心をもちて、世のをさめにと思ひおきてざりけむ、いかにしても引か

へすべからずと思ひたえしか、はたいかなる故ありけむ、世にいふごとく、たゞ思ふ人をうしなひて、遂に世をはかなみ、さしこもりしにはあらざるべきを、いかにしてもたゞ法師として見ることを口をしけれ、弓矢なくひをおはせ、物の具裝ひて、朝廷をかためしめ、かの筆の跡の如く、いとたゞしくいといかめしく備立てゝ、賊をはらはしめなむなど思ひなりぬるを、砦の下より、いと淺き心よ心なの人よと、笑ひそしりてやあるらむ、さるにても、つゆたがはざらむとむかひゐたらむは、ひとりあるこゝちやせむ、と嘆かれしものを、

仙臺の敵討　　柳軒生

奥州白石ノ孝女仇討の事は、人口に膾炙すること久しけれど、傳説の多くは、小説綺語の類にて信するに足らず、女鑑にもお宮お信の傳として、第五十四號に見えたれども、此も俗說に據られしと覺し、近頃、半日閑話を閲たるに、圖らず此が實說を得たり、文中、往々解し難き節もあれど、原文の儘、寫して貴社に寄す、餘白を借し給はゞ幸甚、

享保八卯年四月朔日奥州仙臺敵討

松平陸奥守殿御家老片倉小十郎方の家老職知行千石田邊志摩、此もの享保二年酉三月五日、白石を被通候節、片倉の百姓にて、苗字御免、矢倉四郎左衛門を、右の場所にて切捨に致候、右四郎左衛門に娘兩人有之、姉はおすみ、此節酉十歲、妹おたかと呼、同八歲に相成、四郎左衛門一類に、清左衛門と申者、右四郎左衛門不慮の斷命、殘念に

存候而、右兩人の子引取養育仕、何卒右御家中瀧山傳八をたのみ、親の敵を爲討、本望爲遂度とおもひ込、右傳八は劍術の家にて候故、兩人の子供を連、此兩人の子供奉公に出し、何卒劍術爲習度よし相願故、承知して差置ける處、稽古の度毎に物影より見姉妹兩人にて扇子抔を以て執行仕候を、傳八不審に存、樣子被尋候へば、敵を持候身なりと答ける、私共父四郎左衞門儀志摩と申者被通候節供廻りの行列へ不斗行當り候を、同人儀立腹致其場へ切捨に成申候、夫故、兩人とも申合、其元樣へ御奉公に罷越候よし、涙を流し申ける間、傳八承り、扨てやさしき心底と不便に被存、夫より兩人の者へ、劍術指南被致候、誠に女の身として斯のごとく實心の志ざし、孝行の道

天道に通ひけんや、隨身晝夜出精いたし候樣に申付、其後を一向不伏誤字あるべし劍術修行、相覺し故、奥義を兩人に免し差遣候處、當三月十五日陸奥守御前に瀧本傳八罷出、四郎左衞門不斗殺害致同人姉娘すみ妹娘たか、右志摩敵に無相違始末相分候に付、何卒敵討仕度旨奉願候段、尤年來之始終委敷右陸奥守殿へ申上、且亦兩人え兵法の指南爲致、早速兄弟の女得と覽御直に其者共身が前に可能出旨被仰、兄弟の者孝心の至、能も申立たり敵討願の通り申付間、尙四月朔日巳の上刻に相窮、此節姉すみは十六歲妹たかは十四歲、兩人とも肌着に白帷子にくさりはだぎ、紫手拭の鉢卷妹も同樣の衣類を着し、姉は長刀、妹は、小太刀、則後見には主師の瀧本傳八に被仰

付、敵志摩も覺悟相極、白無垢の小袖斗にて、貳尺三寸の刀一尺八寸の脇差にて、其場ゟ出、十間四方に柵をふらせ其内にて、勝負分には足輕五百人、不殘刀、百五十騎大目付二重三重に取卷、一家中不殘見物仕候やうにと被仰付貴賤ともかたづを呑て扣し事、誠に前代未聞の敵討にて、雙方〇の日限なれど、雙方名乘合、三八共、半時斗戰ひ候へ共、勝負も見え不申、兩人の兄弟は、飛鳥のかけろふのごとく働きける處、名におふ志摩は身の丈六尺ゆたかの大男、力も人にすぐれ一家中に名高き劍術に達せし者なれど、物の數とも思はず切立しが、姉はすかさず付込入、長刀を志摩何とかしたりけん石につまづき請はづし、高股をかけられ、少したゞやふ處を、妹かけより橫合より脇腹へ小太刀差込、又引拔大けさにうち放せど兄弟悅び首をかき取、本望をとげ申候、その〻ち陸奧守へ傳八より言上申上候處、殿樣聞召女の身分に而能本望を達したりと、其後於御前白木の三方に金五十枚、女着用藤色縮緬下着白むく對に被下置て御前を下りしは、誠孝天道を感じ、如斯に大敵討し事妙才也（誤字あるべし）其後姉は伊達安藝殿に被貰、妹は大町備前殿妻に成、傳八も右體孝心の女子貳人劍術出精爲致候段御悅有、持高千石此度爲御褒美貳千石都合三千石被仰付夫迄の名改土佐と可相成旨被仰渡候事、淺野以來の敵討、珍敷事故、見聞候に付、實正を認御目に懸申候間、御覽可被成候以上、

陸奧守家來

卯四月十九日　　　　　牧野太仲

大和屋長左エ門殿

右書状何れの頃仕廻置候や、去年土用干の節、不思見出候處虫喰有之候へ共餘り珍敷書状に付手紙は干候後封置候を借求寫し置畢ぬ

和歌は女徳を敗るもの丶一なりといふ說を聞きて所感を記す

伊勢泉舘　家理

世にありと有らゆる事、己なす事叶はねど、難波津のよしあしに係はらず、ひたぶるに、あしざまにいひなす人ある、淺ましきこと也。嘗てなにがしの大人、今の世女徳を敗る者はしか〳〵かくかくなりと、四つ五つ、ことわけて數へあげたる中に、和歌も其の一なりといふが、籠りて有りき。大人は、世に聞えたる博士也。殊に、漢洋の學には廣く厚き人なりときけり。又品行をさまり、徳操堅き人なりときけり。然れ共、いまだ敷島の道を踏みわけて、後れたる人の栞せし人なりとは聞かず。今一きざみ細にいはゞ、和歌などにはさしも深くたづさはらぬ人なるべし。歌よむこと叶はぬ方の人なめり。大人の早くものせられたる或書をみて、その荒增を思ひやるべし。うべこそ、和歌は女徳を敗る一つなりなど、あしざまにいひなしたるならめ。斯く言はゞ、彼れ腰折歌いさゝかよみいづれたとて、しかはこりかにいふならむといふ人もあらむ。げに惡しかり共、みづから歌よめば、和歌は女徳に害あるものと知りながら、

强ひて稱へいふ人も、うつそみの世にはあらむ。然れ共、己がいふ所はさにあらず。又歌よむといふばかりにも有らぬことは、われみづからこれを知れり。わが大人のいへる所に得えたがはぬはさるたぐひにあらずぞかし。

抑、和歌は、紀の貫之ぬしのいひけむ如く、久方の天にしては、下照姫に始まり、荒金の地にしては、素盞嗚の尊より起りて、婀娜なる歌はかなき言の葉は、まことの姿にはあらじ。つぎ〳〵のみよ〳〵、いとゞ盛に成りゆきては、男々しきも、たをやかなるもありけり。世治りて文事起るとかや。中古奈良のみかどの御代は、内にしては四方のみだれなく、外にしては蝦夷どもの仇なふこともなく、いと平げく安けく治まりたれば、みかどにさぶらふ人たちを始めとし、太刀佩く靭の男、靭負ぶ伴の男に至るまで、皆文事にたづさはりたれど、彼のみだれよには、はしき妻子の絆をたちきり、大君のため、御國の爲と、弓矢とりもち、太刀とり佩きて、額には征箭はたつとも、かへりみせじと言たてたる益荒男の伴も、今は雨露に袖ぬらすこともなく、若草のめぐみをかゞふりて、心長閑に歌よみ琴を彈じ、春の花をみては、散らくを惜み、秋の月をながめては、世をはかなみ、或は歌をもて女に戯れなど、おしなべて、處女の如くなりゆきければ、その人のよみいづる歌、いかでか男々しからむ。歌はよむ人の心のまゝに、強くもなり、弱くもなることいとしるきわざにしあれば、和歌としいへど今の世に至りても、

たをやひたることの、又の名の如くなりにたる、誠に嘆くべき極みなりけり。されど、鎌倉よ天の下の政をとりすべたる世　又下りては徳川氏の世には、さる歌人やう〳〵なくなりて、かへりて古へざまのいできたれバ、男々しき歌もよみいだされ、女に心を通はす器械の如くうたをこゝろえあるは、すべて處女のたをやかにはかなきものと思ひなす弊害も、やゝうすらぎたりけり。然はあれど、猶和歌は女のよむべきものが、はたみやび男のもてすさぶべきものゝ如く、世の人に思はれぬるぞ悲しきや。さきにいひつる如く、和歌の男女の戀情の媒の如くなりたるは、是全く和歌をよみひがめたる弊害なり。その弊害をみて、和歌は女德を敗るものゝ一なりと論ひ掟てたるは、少しく速了にはあらぬか。水はわれ〳〵の命を繋ぐ綱なり。野邊の草木も、之なくてはおひたゝざらむ。されど、ともすれば堤をくづし、田をこぼち、あるは家を流し、人の命を絶つ洪水の害あり。火は吾々のたなつ物をかしぐもの也。寒さ骨に徹る折も、之なくては凍え死ぬべし。されども、時としては、萬物を燒き亡ぼす火災の害あり。この水火の害を見て、水火は弊害あるものといはゞ、誰か之を速了論者といはざらむ。誠に弊害の有無は、之を用うるものゝ心をつくるとつけざるとにあることぞかし。和歌も猶然り。吾々の思想を述ぶるにつけては、水火と同じくなくては叶はぬもの也。花になく鶯水に住む蛙いづれかうたをよまざらむ。人は萬物のをさとして、いかで歌をよま

であるべき、和歌は女德を敗らむには、男の子として之をよみいでゝも猶女德にさはりぬべし。若し然らば、この由來久しくいと貴き和歌の道も、遂には地を攘ふに至らむ。吾々の思想を圓滿にのぶる和歌の道は、悲しくも世に跡をたちぬべし。唯時を得がほに世に殘るべきは、漢洋の詩歌のみなるべし。但從來の和歌に完備せざるふしもありけむ。古來の歌人に固陋偏僻なるものもありつらむ。固より改良すべき點あらば、之を改良せむに何のためらふ所かあるべき。

世の人よ。かの大人の和歌は女德を敗るものゝ一なりとの説をきゝて、和歌はいやしきものなりと思ふ事なかれ。之をよくよみいでゝ、所謂弊害に陷らざらむと勉めて、こよなき利益ありなむ。ゆめ返しくすも弊害のみをみて、この尊きみちをおぼろにな思ひそ。世の人々。

園のなでしこ

赤澤山人

江戸大奥に咲ける花、千紫萬紅、とりどりに美なりといへども、撫子の殊になつかしきは人の目とどむる所なり、武藏野原に生へる草、千緑萬蒼おのがしゝ、艷なりといへども、紫の優れてゆかしきは、誰も心引かるゝ所なめり、溯り過ぎて、溢れむとしたる德川の流本に反りて、靜に澄める水の上に影をうつしたる一本の花あり。其の色は撫子に似たり。紫に似たり。父祖の固めたる江戸の根城を枕として、優々緩々、醒めての後はと、歌ひし夢を昨日と見て、仁慈の聞え高き吉宗公、世

繼治しめしおもり德川の逆まくながれだに、漂泊
したる天下の蒼生、浮木を得たる龜の思ひ、蓬萊
の島にも至れる心地に悦びて、老弱男女早く御仁
政を仰ぐ日あれかしと、頭をのべ、足を翹て、唯
其のことをのみさゝめきけり。
大奥女房どもの中、上下によらず、顏貌の美麗
なるものは、其の名と年齡とを書きまゐらして上
るべし。
御觸の趣意はいかにあるらむ。知るよしなけれど、
言ひ傳へ、聞き傳へて、田舍の果も其の噺高うな
りぬ。斯くわざ〳〵召出さるゝ上樣御中﨟など仰
付けらるゝにや、と推量るは子にもろき世の親心
なり。されど少しく姿色ある娘の親等は、今こそ
吾が子に奥女中の本意遂げさせて、錦の晴絹着す

べき時至れりと、一代の榮果早身に[illegible]に
[illegible]心得て、内々親類縁者招き集へて、歌ひつ、舞ひ
つ、悦びの宴など催したるもありしとかや。さる
ほどに、召しに應じて集りたる大奥の後閤中には、
彌生の春の色香こぼれて、咲き香ふ花數をしらず、
後れバ取らじ、洩らされじ、君の覺えは吾が身に
こそと、目しろくものも多かりしとなむ。今に御
掟やあると心いらちて、待つかひもなく、書記し
たるものどもは殘らず暇賜りて、各家に歸されぬ。
いかならむ、起由はしらねど、并居る女性思ひが
けぬに眉をひそむるおかしさは、露を含める糸萩
の、かことバかりに散りそむる風情も斯くやあ
らむと、思はれぬ之をきく親の心は一しほ、思ふ
矢壺をはつされて、あたらいとしの吾が子に思は

ぬ泥ぬられたり、かひなの業や、とかこつものも
いと多かり、公の御思寄は、姿色優れたるは何方
に行くとも手便あれど、徒に大奥の花と散らさむ
こと、いかにも口惜しき限りなるを、姿かたち醜
くゝて、嫁すべき手段失ひたるはいと、不憫に思
はるれバ、さるものをこそ永く懇に召し仕ふへけ
れ、との御掟なりしを、さる深き御仁惠なるべし
とは知らざりしこそうたてけれ。
清しとて水にも趣きはありぬべきものを、高しと
て月にも情はありぬべきものを、物にふれてさゝ
波立つる水の心、其の趣はいかにあらむ。雲にさ
はりて片割れたる月の姿、その情はいかにあらむ。
ましで血を持ちて生れたる人の、何とて心に感ず
ることのなかるべき。情の動くことのあらざるべ
き。公又木石にあらねバ、感ずることもあらむ。
動くをりもあらむ。唯其の御心を動すことをせぬ
にこそ。御心に感ずるをりを得ぬにこそ。
いつの頃よりか仕へきにけむ。一人の奥女中あり、
芳紀正に十八ばかり。花の顔はせ、澤やかにして
うるはしきは、旭に香へる櫻とやいはむ。雪にさ
はへる梅とや稱へむ。立居優れてしとやかに、萬
實なる振舞は、殊に心ある人の眼とゞむる所なめ
り。
世に彌生の花を咲かせむと希ひ給ふ外一物なき公
とはいへ、猶妙齢なる御よはひなり。盛なる花の
散るを見むこと物憂しと思ひ給ふ公にはあれ、纖
弱なる貴公子なり。撫子の花はなつかしと見るを、
紫の一本はゆかしと思ふを、公獨り見はやさぬこ

とやあるべき。ゆくりなく香りくる妙なる匂ひは、はしなくも深く公の御心にしみぬ。公はこの二三日はあやしむばかりやうかはりて見えぬ。人はこれをや何といふらむ。

上樣の御召と聞きて、老女はいそぎ參るに脇息に寄りたる公は面はゆげに、今少し近うと仰せらる。老女や吾は和女に賴みたきことどもあるを、聞きわきましくや、といひてはゝ笑ませ給ふ。老女は公の御けしき、世の常ならじと思へるものから、色にも出さず。思召の身にたふることはいかやうのことも、といらふれど、公は肱置き直して、故あらむ中臈一人召し上げむと思ふを、然るべきものありや、と密やかに問はせ給ふ。天下の將軍とまして、飛鳥も落ちなむ、無情の草木も靡かぬことなき威勢もかゝることには流石に若き君かなと心おかしく思ひながら、霜を帶びたる頭少し上げて、いらへする姿といひ、形といひ、いと物慣れたるけはひあり。公にも見そなはし給ひつらむ。一人の女房、元は關東の產にて御郡代伊奈半左門衛忠達殿の御配下、或農夫の娘なりしを、御郡代の屬吏藏といへるもの養ひとりて宮仕へさせつるもの、人となり心ざまさかしく物になれてまめやかなるは、類稀なる處女に候ふ。多くある女房の中にこれに勝るものはあらじと思ふを、いかに思召し給ふらむ、といへはようこそ心付きたれ、といはぬむかりの御けしきに公の御心のさゝ波はいよゝ間近く寄せきて、見る〳〵御顏のわたりまで潮さしぬ。

女房は今しも暇得たる者と見えて、獨文机に寄れり。吹きいるゝ風心ありげに鬘つらをはらひ、更たけて結べる髪つやゝかなるに、後毛の一ひら二ひら襟本にかゝるを知らぬさまなるも心にくし。長々と書き綴るは久しく絶えし故里のたよりきかむ爲か。書きては思ひ、思ひては綴るさま、深き意を卷き込むるものと覺ゆ。さら〳〵と書き納めたる筆の綾、ゆかしと思ふ人もあらむぞ、人のけはいに見られしと、手早く文庫の底にひめ置きぬ、をりしもいり來るは老女よりの使なりけり。いかなる仰言ならむと思へど、老女の御召とあれば猶豫もならずいそぎゆきぬ。許してや、和女の閑居をさまたげて、といひつゝ老女は女房の姿をつく〴〵見、和女の公の勤にかしづきて落度なきはいまだ更ならねど、今日は老女改めて御苦勞の旨を聊、といひさしてほゝゑみ、和女の心のたけはやう〳〵のびて、近頃は吾が君にも一しほの御意、をり〳〵は和女の噺もいで給ふぞや、御大儀の程は老女幾重にも心得居れば、この後も猶、といへば女房は何となく胸おどりて、兩手を疊に重ねたるまゝ動きも得せず。見らるゝ如きふつゝかなる妾のさる仰せ蒙りては御勤に對しても耻しき至り猶御老女樣の御力添を願ひて、といひつゝ顏も上げねば老女は近く膝をすゝめ、一際聲を低くめて、他にはあらねど、今日は和女にしらすべきうれしきことありて、吾が君はこの二三日は和女の爲の煩ひぞや、たつて和女を御中臈に召さむとの御上意、内には錦帳の許に輕羅を重ね、外には黒柄の

輿に先をうたする身の榮達、今見るやうに覺ゆるを、かゝる果報に生れたる和女や誠に惡うて、なとさとすか如く、いたはるか如く、老女は心を碎きぬ。

女房一時よそめいたすから紅の楓、思ふことある身には其もいつしか色あせて、いき〳〵とせる眼に露をもたせ、愛々しき面貌一しは香はせ、亂れたる髪の毛つくろはむともせず、妾は固より片田舎よ生ひ立ちし名もなき草、いかに忝なく御眼に止まれたとて、かゝるいやしき種のいつまて長くかゝる大庭に生ひ立つべき。御惠の露は身に餘りて中〳〵に重う侍る。かゝる御仰は御老女さまの御はからひとも覺え候はず。さる畏き御仰は再御開き申すまし、といひさしてこほす一雫、誰か爲にろゝがむとての涙なるらむ。老女はこゝぞと一しは身を寄せ、其の野中に立てる一本紫なれとこそ公にも撰びて手折るなれ。この大庭の仇なる花にまされはこそ公にも別けて愛づるなれ。野中に立ちて荒き風雨に逢はむより、こゝなる大樹の陰を頼みて百世も千世も榮ゑむこと、身に換へ難き緣ならずや。千歳不遇のこの一擧他事あらむやは。身の行末も思へかしと、他事なくいへと、斯くと思ひ定めたる女房の一念、容易く動かすべくも見えず、晴れやかなる眉、今は一しは緣を帶ひ、淸らなる膚今は一しは赤き心の現はれて、高尙さけはひは、げに櫻なり、梅に似たり、かゝる上は又辭退むべきすべもなきを、吾か身の希望打明けて許可なけれバいかなる罪過も厭はじ。避けじ。寬仁

にまします吾か君、いかで御許のなかるべき。さなり。誠の心現はして、哀を乞はむ、と思ひ定めて跪と身搆へ、そろへたる兩手に誠のすぢを示して恭なき御上意、露おろそかには思ひ候はし。身にふさはぬ御慈みは百年の生命を一度に捧ぐとも盡き侍らぬを、妾には稚きをりに親なる人の定めおかれし良人あり。忘れも侍らし。妾の里をいで來るをり、母なる人は妾を召して女子程世に謹むべきはあらぬぞかし。今日よりは分にもあらぬ宮仕する身の上、大小名の寄り集ふ廣き江戸の奥勤、心に迷ふこともあらむを、迷ふは汝の過失ぞ。唯一すぢに仕ふべき君にかしづきて、夢にも仇なる色に心をそめす。歸らむ月日を樂めや、と敎へられたる涙の一言、吾か身一ッは死ても角ても、この訓言は穢されし。御奉公に露の過失なかれしと心に念じ、數ならぬ身の恙もあらで、今まで過しつるさへ勿體なきに、今又かゝる仰ありて、人めかしくなり侍らむこと、海山盡きぬ大恩にはあれど、かくては再び故鄕へ歸らむたづきも失ひ、年頃親の心づくしのかひもなく、妾の身にも不貞の罪は免れ難し。願ふは御老女樣の御情に妾の切なる心汲み取り給ひて、妾の希望協はせ給へと、玉に等しき兩眼の露に、夕映の花の面貌も萎れかゝるに、老女はきゝて哀は催し、さることありと知らむ斯くは强ひ申すましきを、世に比類なき和女の貞節、はじめて知りぬ。空しくやはさすべき。心安かれ、と今は中々になくさむべき言の葉もなくて、うちしそみぬ。

打ては靡かむ綠の若葉。觸るれバこぼるゝ尾花の露。如何に潔白に其の色を保てはとて、如何に眞直に其の身をなせバとて、吹きくる風の威にはいかでかは堪へむ。いかでかは忍バむ。希ふこと思ふに任せぬは世の中の常とこそ聞け。月は村雲にのみおほはれて、限なき彼方の空に淸き面影を現ことはなきか。花は嵐よのみなやまされて泥濘一片の餘波をとめて止むものなるか。いかでさわらむ。淸浄罪なき月の面影、いつまで村雲の爲におほはるべき。艶麗可憐なる花の姿容、あはれを歌ふ人なきにあらず。まして仇なる色をまじへぬ紫の一本ぬきいでゝ咲く撫子の花、手折るを惜しと思ひ反してさながら愛づる人もありけり。

公は二人を呼び近けて聲はげしく、老女それなる女に暇遣はさむ。苟も吾がいふことをきゝいれぬ不所存者、この城中に置くことは一刻も叶ひ難し。早く身の暇取らせよ。大方はかゝるべしと思ひ居たれど、今更思ひの外に心地迷ひて、汗あゆるを見て、公は堪へずやありけむ。俄に笑ひ出し、老女許せや。戯れなるぞ。女房も恨みとおもひそ。誠は和女の貞操の堅固なるに愛でゝ暇とらするぞ。心に懸けな。婚儀萬端の用意は和女の養父藤藏に仰せて計らはせむ。又衣服調度の代は天下の將軍自送りいたさむ。かゝる上は一刻も城中にをるは汝の爲に宜しからず。事調ひなば今日にもここを罷り出でよ。思ひ設けぬこの一言、女房の驚きは如何バかりなりけむ。着なかせる絹重けに見ゐて、身にも堪へぬバかり、ひれふしてはのかに

けしきばむ豊頰の露、其の色は紅なるべし。身にさり所なき罪免かれじと思ひたる。事の中〳〵にかゝる惠の露にうるはむとは夢かとばかりに臥ししづみぬ。大奥の中、武藏野の原生ひ立てる千草の中にうれしくも撰びいで給ひしこの一本、愛でもせず、手折りもならで、別るゝ公の御心いかばかり露けく在すらむ。同じ時雨は老女の袖にもふりかゝるを、斯くては爲に惡しかりなむ、と思へばいひなぐさめてまかりいでぬ。
花ならば櫻といはむ。梅とやいはむ。稀世の節婦、うち反す袖の香には胡蝶も迷はむ絶世の美人。自ふり捨て、落つる野末の果、雨をも避けず。風をも厭はず、比翼連理と契りし二世の良人の爲には、將軍の威にも靡くこそかは。朝に開く烏の聲は、昔大奥にたしなまれし騒ぎには似ず。夕に結ぶ温き夢は、錦繡の裏に包まれむよりは樂しかりけり。飾らねば髪はそゝろに亂れ、つくろはねば形はあさましけれど、天眞の色香は却りて豊なる微渦にあふれ、眞實なる形容に現はれぬ世にかゝつらはねは、身をさまたぐるものもなく、人にねたまれむうれひもあらじ。心のまゝに添ひかしづき、思ふまゝに睦れあふ、紅白相爭ふ春の錦をうち捨てゝ、蓬生繁きおどろが下に義を立てぬかむと、し道ならぬ榮果を振りちぎりて柴の藁屋に吾が夫の爲のさ夜衣縫はむとする彼の心の操こそはげしけれ。」
義をとりて操をかへぬは稱するに餘あれど、義に感じて操を毀つけぬも又たとふぬにたへたり。上

にかゝる明君ありて。下にかゝる貞婦あり。怪むへきにあらず。思ひめぐらして、今の世に生れバ、思ふにたがひて口惜しきことのみおほし。世の姫たち以ていかにおはす。

忠孝二筋道

渡部乙羽

其十

臥猪の床に起臥し、磯の時雨に身はうたるゝとも、朝夕に侍き奉る若君さへましまさば、こゝ八丈島の絶壁も、玉の扉に優るなり、よしや鬼の栖む島根、悪蛇の蟠る洞なりとも、一命は君に捧げたれば、入りても見む、住みても見む、世に忠義の膽に立つ歯牙あらば、快く噛まれて死ぬべしと、斯く覺悟極めたる妾を、鈍しくも何に血迷ひたるか悴權太夫、母なる妾に孝を竭さんために、これまで冊き奉りたる主君を捨て、島を出でて都に立歸れよとは、よく〳〵言甲斐なき奴なるかな、えッ汝は妾が子でない、若しも汝は妾が子ならば、母が永の年月、この島に在るを慰めて、怠らず忠義を竭し給へ、拙者も亦御臺樣に忠勤を勵むべしとは、何故云ふて呉れぬ

ぞ、十幾年の憂中に、今日の今まで逢ひたし見たしと、旦暮心を焦したる、望みも今は水の泡、持つべきものは子寶とは、如何なる人の云ひ初めけむ、妾は子ゆゑに、憂をます鏡、映す心も親と子と、裏表ある世の中や、あア儘ならぬお宮仕へと、泣く〳〵涙のにぢみ書き、心のたけを文して云ひ越し來りしより、淨橋權太夫は或日役所に召出されて、その旨仰せ渡されける。

權太夫もかゝるべしと、豫て覺悟はしたりしが、唯萬に一つの望みをかけ、若し母樣に現世で逢ふこともなりもせむ、なんぼう嬉しかるべしと、文の返事を待詫びて、花を見れども色香なく、月は殊さら雲ありて、晴れぬ思ひを云ふ由も、泣いては袖に露を置き、澄む夜の影を映しては、我も母御と兩面の、月の鏡を合さむと、樂しみ待たる甲斐もなく、たま〳〵母の返書を見ては、驚かれぬる事ばかり、女々敷いものは子でないと、叱りの辭に胸迫りて、役所の白洲に泣き伏しぬ。

諸役人も貰ひ涙に袖を濡らして。あア、拙者も不覺の涙に呉れた、コリヤ權太夫、其方が志は不憫なれど、御上にても是程に仰出されて、叶はねばなさるべき樣はない、その代りには外に願ひ奉りたき事あらむ、御叶ひ下さるべし、何うぢや、外に思ふ





仔細は無いかと、物和に問はるれど、權太夫は畏りて。私卑賤の身として、上を憚り奉らず所存を申上げたる處、重々御取上ありて、これ程までに仰下さるゝを、この上に私の所存を立て申べきにあらず、但し一つ願ひ奉りたき事こそあり、そは前田家は浮田殿と由緒あれど、彼家よりして毎年助成の金と、入用の物を永代八丈島へ、送り遣すべきやう御沙汰あらバ、限り無き御恩澤なり。左すれど母も悅び申すべく、母への孝行これ一つにて、決して外に願ひ奉るべき事なしと、眞心をもて言上すれど、役人直に御取立ありて、その事朝議に上りけり。

斯くて權太夫が願意を朝議に上せけるに、一同その至孝を感心ありて、そは古來例無き願なれど、孝は萬善の本と云へり、その儀苦しかるまじ、叶ひて得させよ、さりながら金も員數多くは成り難し、其外の物も品によりてならぬもあるべし、所詮篤と僉議して其品數を定め、前田家に申渡すべしとて、權太夫を召出して、その沙汰ありければ、悅喜大方ならず、雀躍するも道理あり。

權太夫はこの喜びを先づ御臺所に知らせんものをと、お屋敷に伺候し、庭石傳へに奧の間に入らんとすれば、籬の下には白菊の花露に溢れて、泉水に飼ふ魚の餌と怪

まれ、松の下苔濕ひて、秋の蝶の哀れ氣に飛ぶめり。御臺所は髮剃らぬ尼の心になりて、花を南園に採りては、別れし夫の繪姿に供へて、精進潔齋の行を澄し、香を東の亭に燻きては、玄宗の帝ならねども、反魂の俤を見せよと泣き給ふ。かゝりけれど日一日も、心の結ぼれの解くる時とて無く、愁色面に上りて戀に窶れ。思ひに痩せて、また去年の艶なる姿ましまさねど、權太夫先づ涙に吳れて、暫時は顏を上げ得ざりき。御臺所は權太夫の手をとり給ひて。おう。無事で居るか、忘れず訪ねて、來て吳れしと、嬉し泣きに泣き伏し給ふ中にも、權太夫は君臣の禮儀を亂さじと、御臺所の前に兩手を支き、ありし次第を殘りなく申上ぐれバ、これも喜びの眉をひらきて、兎角は濡るゝ袖時雨、乾く間とてもあらざりけり。

それより後一月餘を經にけむ、或日の朝なり、旭光大海を呑みて、萬波金龍の鱗と散る頃、長風に孕みたる帆船一艘、白き帆木綿に劍梅鉢の紋を、黑々と染め拔きて、霞の中にもそれと目に立つは、これ百萬石の前田家より八丈嶋に在る浮田殿の許へ、年毎に送る扶助船なり。荷は大方に積み込みて、今や纜を斷らんとする間際、此方の小松原に駈け來りて、その勇ましき船出を見送る御臺所、權太夫も御供申してそ

の傍にありけるが、いと嬉し氣の面色して、御臺様アノ荷の中には、殿様若様に奉るべき薬もあり、まつた我が母に參らする音信もあり、これからは思ひ煩ふて病氣をしし給ふなど、云ふかと思へど、船は櫓櫂の聲と共に見えず聞えずなりにけり。さても澤橋權太夫は日頃の願望も叶ひたれど、それより出家得道なさんと、逸るを友に引留められ、前田家に召抱へられて、親子忠孝二筋の道を守れる武士氣質、その名は傳へて今に殘りぬ。

（そはり）

文林

河邊菊　東久世通禧

谷河のながれのすゑもにほふらん
岸のいはまのきくさきしより

鍋島　直大

もみぢ葉のちりて流るゝ河みづに
影こそうつれきしのしらぎく

前田　利嗣

もみぢ葉はまだ影みえぬ山がはの
岸にさきたるしらぎくのはな

前田　利鬯

岸にさく菊のしづくやおちつらん
ながれもかをる谷がはのみづ

もみぢ葉のくれなゐ深きたに川に
　一むらうつるしら菊のはな　　高崎正風

水邊秋風

池水にさゝなみたちてみぎはなる
　あしふく秋のかせぞ身にしむ　　諏訪忠元

河邊菊

行水にかげのうつりてかはぎしの
　菊はそこにもみえわたるかな　　宮地嚴夫

香に匂ふ波こそたてれ大ゐがは
　みぎはの菊のはなのさかりは　　坂正臣

谷川のきしはふつたのもみぢ葉に
　まじりてさけるしら菊のはな　　小出粲

いははにも千代は譲らし河かみの
　さゝれに根ざす白ぎくのはな　　谷勤

つりしつゝ河べの堤きてみれば
　一むらさけりしらぎくのはな　　内藤存守

瀧つせのしぶきにぬれて咲にけり
　岸のいはねのしらぎくのはな　　大口鯛二

半出月

山かげは猶ほのくらきつきの面を
　なかぞみ空のものとなすころ　　西川須賀雄

萩風

糸山貞幹

なにとなく萩の上葉をふくかせも
秋のいふべはあはれなりけり

水邊菊　石丸 忠胤

いく秋も色はかはらじしらぎくの
千代のすがたを水にうつして

月前忘殘暑　林 甕臣

暑しとてはらひわけたる北まどを
月のひかりに閉ぢてけるかな

在原業平朝臣　三浦 千春

小野山の雪ふみわけしまでゝろの
跡はちよまでのこりけるかな

野薄　櫻井 正男

少女子のゆきかふ袖も見えぬまで
野べのすゝきの花さきにけり

社頭早秋　草野 隆道

すみの江の渚すゞしくこんわきを
神につげたるまつかせのこゑ

晩夏　篠原 政頼

しのびにも草葉にむしのこゑすなり
今宵やなつのをはりなるらん

立秋風　大町 芳衛

此ゆふべ秋たちそめてまくずはら
うらさびしくも風わたるなり

河邊菊　鍋島 榮子

一村のすゝきまじりに咲きにけり
野河のきしのしらぎくのはな

蜂須賀隨子

むれてゐる川べの鷺とおもひしは

さくまら菊のはなにぞありける

前田　朗子

水そこのちりまで見ゆる山がはに
影をうつしてさくさきにけり

柳原　愛子

立よりてをることかたし山がはの
いはねに咲ける白ぎくのはな

松平　健子

行水のかげみえぬまでいさゝがは
咲きおほひたるきしの白ぎく

北島以登子

もみぢ見に舟より行けば山がはの
水にうつれり白ぎくのはな

鳥尾　廣子

薄のみしげる野川にきくのはな
一もとみるもめづらしきかな

田邊　龍子

山川のきしにひとむら咲きにけり
ちりにそまらぬ白ぎくのはな

初秋風

諏訪　晴子

きのふまでせみの聲する松が枝も
今朝ふきそむるあきのはつ風

晩夏螢

安東　菊子

おのがよの夏もかぎりと夕ぐれに
ひかりけちつゝゆくほたる哉

折にふれてよめる

阿部　優子

もろこしにむら立さわぐ雲晴れて
日影かゝやくときぞまたるゝ

朝顔　尾崎すう子

はしゐしてむかふ鏡にかげうつる
露うるはしきはなのあさがは

遠聞鹿　鹽井ふく子

ふきおろす風のをり〳〵たかさごの
尾の上の鹿のこゑをきくかな

月前恨　鹽井長子

何となく袖になみだのかゝるかな
月にうらみのあるにあらねど

議員撰擧　河野文子

君のため民のこゝろもやすかれと
まことの人をえらびこそすれ

大風雨　鹽井雨江

雲のゆきゝ常ならず、吹きくる風のをり〳〵、雨さへさそひきて、日一日、いとおぼつかなくて暮らしたる夕つかたより、そらのけしき、いよ〳〵あしく、そらとぶ雲は、狂へる駒の繩をはなれ、きづゝきたる獅子の、あらびにあらびたるごとく、おそろしきいふべうもあらず。雨は、よこさまにつぶてを打つばかり、風おどろ〳〵しく鳴りさけびて、こずゑををり、垣をぬくさま、さながら、ありとある鬼神の、あつまりにあつまりて、あめがしたを、もみにもまむずるなかり、いとすさまじくなれば、あまどをかたくとざし、かゝるときこそ古の人をとおもひて、ひごろ好める文をひもとき、強てよみもてゆけど、魂魄の身にそはね

ば、文字もさだかには見えず。風いよ／＼たけりたち、雨ます／＼狂ひて、戸も微塵にならむとすれば、家は、ゆら／＼とゆらぎて、一葉の舟に棹さして、大海原をわたる心地す。かぜのひゞき、あめのおと、つのりにつのれば、千丈もあらむ大波の、わきたちて、いまや、ならくのそこにしづまんとするかとあやしまれ、稚き者は泣きまどひ、老いたる者は經誦しなどす。われも、こゝろよわくてはとおもへば、おそれをのゝくをなどどもに、などさは心よわき、かうやうのときこそ、いみじき歌よむべけれなどいへど、手足はわなゝきて見ゆ。やりどのひまよりうかゞへど、ぬばたまのやみにて、あやめもわかず、唯、そらなりとゞろきて、いづくともなく、人のの丶しるこゑして、百萬の大軍、ひたよせによせきたり、蹄をあはせて、さゝやかなるいほりをかけちらさむとするかとおもはれて、いくたびか、身もちゞみ、たましひもきえ、さては、百雷の一度におちむとかりのおとして、天もさけ地もくづれむずるとみれど、いまは、はや、かぎりぞと、あまたゝび絶え入る心地、夜一夜やすきおもひもせず。あかつきちかくなるまゝに、ふくかぜも、ひとこゝろも、かたみに弱りゆきて、稚きものは枕につきなどす。われも、いねんとすれど、ゆめぢおだやかならず。やがて、おきいづれど、軒ばをたゝきしあめもおとなく、さばかりくるひたる風のなごりだにとゞめず、そらしづまりにしづまりて、いづくに、よべのあらしはふきたりけむと、おもはるゝ

がをかし。こずゑは、大かたふきとられ、木の葉は、ところせくふりつもり、門もたふれ、築土もくづれ、のべも庭もひとつになり、野寺ののき、あらはに見ゆるも、あはれなるに、松の木のおほきなるが、根よりふきたふされ、やなぎのみ、たよ〳〵として、殘りたるは、風にいかなる心のありけむ。きかまほし。

破れたる扇を見て感あり

横井知萬多

扇を一つの國とせバ、要は君、骨は中にありて其國をかたむる人、地紙は骨によりて成立てる民とも見つべからむ。今この扇は、骨もならひ、要もあれど、地紙はやぶれさけて、あふげども風起らず、名はもとのまゝにのこりてあれど、はやく扇といふものゝ價を失へり。昔は金をもとかすとかりあつくて、何くれの持ものさへ打おかるゝ中に、ひとりめでてはやされて、外へいづるにも、内にあるにも、片時だにすてられず、時めきたりけむを、今は顧る人もなし。こは其價なければなり。あはれ骨は立ならびていかめしく、要はとりすへてもとのまゝにあれども、風をおこす基なる地紙はちり〳〵にやぶれさけたれバ、何の用をもなさす。さりとて骨をれ、要なからむには、そもまた何の用をかせむ。三つのもの備はりてこそ價ありともいはめ。めではやされて時めきもすべけれ。一つだにかたはならましかは、たゞ名のかたみにのこるのみならまし。あはれ國もまたかゝらしや

は。

夏の夜の月

松本ちわき

湯あみはてゝのち、遣水のすゝしきあたりに端ゐして、團扇つかふ手もゆるらかに、月まつほど、東の山のは、やうやう赤うなりて、松のけぢめも見ねわき、やがて大きやかなる、紅のきぬ笠と見ゆるが、さしのぼりたる、いはん方なくをかし。青葉にとまる露、かげをやどしてきらきらと、玉なき庭も、玉をちりしきたらむやうにて、なかなかにをかし。折しも、かなたの池の面より、そよと吹きくる風、月影とともに、うす衣の袖をとはして、涼しさ身をかへたるごかりなり。げに夏はよる、月の頃はさらなり、と古ごとさへ思ひいでられて、獨ごつほど、月はや、松のこずゑにかゝれり。亦ひとしほのながめになむ。

春と秋との辨

師岡須賀子

たとしへなきものと、清原のおもとのいへりけむ、夏と、冬とは、さることなれど、なほ、春と、秋とのけぢめこそ、いといと、いちじるけれ。春たつときけば、勇ましく嬉しかれと、秋たつといへば、淋しくあはれなりや。春の風は、いとゆるく和なれど、秋のかせは、荒々しう身にしみわたりぬ。花をもよほす春雨は、いとしめやかに、紅葉をそむる時雨は、いとあわたゞし。鶯の音、雲雀

の聲をきけど、心うきたち、雁のね鶉のこゑを聞けど、こゝろうらふれぬ。花に眠る蝶は、露の下なる虫の哀をや知らざらむ。春は、木草やうやうもえ出で、秋は、やう〳〵枯れおつ。はるは、一つみどりに、秋の花野、千ぐさなり。春の花は、木に多くして、色こく、秋は艸に多くして、色淡し、朧にかすむは、春の月にして、さやけくすむは、秋の夜なり。曙をめづるは、春にして、夕ぐれをながむるは、秋にあり。霞といへど、のどかにして、きりといへば、あはれ也。されど、昔より、春に心をよせし人、秋をめでし人、心々なれば、その優劣もえ定めがたかりき。秋山われはとのたまひしかしこさ、春こそことにおもひけむめでたさ、物しらぬおのれら、思ひわくとなけれど、春は、のどかに賑はしけれど、物のなり結ふときならず。秋は、あはれに淋しけれど、田畠の作物より、木のみなどまで實りて、収めとるべき時なり、その作物このみは、皆あらき風、はげしき暑、さびしき雨を凌ぎて、後にこそ得るなれ。あはれ、萬の業も、風をふせぎあつさをしのぎ、雨に堪へて、後こそ、とげうべけれ。されど、おのれは、秋こそ、いと樂しく、嬉しきときを思ふなれ。唯、盛なりとて、花をめで、皎しとて、月にあこがれてのみあるべしやは、

清きなぎさ　井上頼文

里蚊遣火　辻村梅太郎

すみにすみたる月は、大空にかゝりて、すゞしき

風さへふきいでぬ。げに夏は夜こそたぬしけれ。をりしもわらやの上に、一條の烟たちのぼりぬ、月はくもれり、風は目にしみぬ、あな心なのわざや、かのやの人こそ、あたら夜をそこなひたれ、もしこの烟たてざらましかば、月はくもらざらましを。風はすゞしからましを。にくむべし〳〵、いでたゞさむとて、たちいづ。をりから、

やど毎にたつる蚊やりはほそけれど空には同じ烟となる、とうたひ行く人あり。げにさなり〳〵、かの家のみならじ、家とある家の烟なるを、かの家をのみうらむべきことかは。甲派をたふさむ、乙黨をこらむ、またもえにくゆるけふりは、天のしたにみち〳〵たるものを、このけぶりをおこさせたるは、何ものぞ、蚊こそにくむべきものなれ。つみなき人を、うらみつるよとて、やみぬ。あはれ無實の人を、つみにおとさむとしたるこそ、我ながらうとましけれ。つみなき家をにくみしこそ、我ながらおろかなりけれとて、あふぎみれど、月は、またすみのぼりて、もとのやうなり。いとはづかしかりけり。

机

阿知和安彦

友がり行くに、書齋のあたり、机上の取なしなどは、先目にとまる者あり。はなは、夫に因りて、主人の心の程も推しはからるゝ者なればなり。一閑張に卷畫など物したるは、優美にこそ見ゆれ。大凡の白木作りなるも、硯、筆づゝ、けいさむ、はては書物など、凡てついで正しくのせ置きたる、

いと／＼目出たし。おもての新しきに、笹の葉の如き墨の跡の、薄く厚くつきたるがまれ／＼なるは心悪き者なり。折々の花の枝など、ひとひら二ひら、さゝやかなる花がめにさしてすゑたる、風雅にてやさしげ也。から掘したる朱檀の机に用もなき小説、寶石その外の者所せき迄並べたるは、中々に心おとりせらる。草紙の代りにかど思はるる迄、黒々と落書したる、何の怨ありてかと思はるゝ迄、こゝかしこにきづゝけたるは殊に見苦し。是は寺子屋、小學校などにこそあらめ。ちりはこりの高く積りたるは更にも曰はず。世には旦暮そのもとにより人にして、腰うちかけ、足さへあぐるもありとぞ。机もし、靈ありなば、いかにその無禮なる咎めなさまし。いかにその不運をかなげかまし。番頭の臂つき、長松の坐眠臺などならむさはれ。己がどち、書齋に備へ置く机などは、殊に心づかいあらまほしき者にこそ。さりとて、唯、淸げにかざりなし、けがれむ事を恐れて、手もふれぬやうにてはなかなかなりや。夜ひる離れず打向ひ、手ふれ、肱つき、書讀み、物かきてこそ、誠にその用法を得たりと曰ふ可けれ。かくてぞ、彼の職も全かりぬ可き。ちりは如何にうち拂はれたりとも、いかにうるはしく飾られたりとも、主人に捨てられ、ひとり淋しき書齋の留守番たらむには何かせむ。世の學の業に從はむ者、たゞみはくちて、ゆかくぼむとも、おしまづきはやれて、肱の骨あらはるゝまでも、明窓のもと、淨机のほとりに、倦まずたゆまず、いそしみはげまゝほし

うこそ。もしこを用なき者とまたらむには、忽ちその身も心あらむ者に見捨られなまし。今年五月某日月次試業問題に應じてこの一篇をかゝむとす。

折から何やらむはのかに聞ゆ。何か。机の靈の叫びか。否時鳥の大空を渡るにぞある。血になくにか。はた吾をあざけるにか。筆さし置きて考ふれど、哀かたはらいたきは、またおのが机のあたりになむ。もし心ある友にとはれなむ。

雜報

●婦人の表誠　に關る美擧は、上は、親王王妃の方々より、下は、賤婦に至るまで、日々に增加するは、我が國婦人が忠愛の誠心の、最厚きを知るに餘あることとなり。こゝに、又、女子高等師範學校舍監山川二葉子外四名の婦人が、同志の婦人を募りて、防寒の具を製して、遠征將士の勞を慰めんとて、こゝに、其の募集に着手せられし由、其の書狀は、左の如し。

前畧今般日清開戰と相成候に付ては國威を輝かさん爲め遠く異域に派遣せられたる我海陸軍隊の勞苦は漸次嚴寒に向へは一層甚しからんと存じ我々同志相謀り廣く金員を募り防寒の具を製し以て之を恤兵部に納め聊か其勞苦を慰めんこ

とを計畫致し候併し最早貴夫人方御企の內へ御出金相成候向も有之候半か何卒此趣意御賛成被下多少御出金相成候樣希望致し候

追て御寄贈金員は金十錢以上十月十五日迄に主唱者の內へ御廻送有之度尙ほ寄贈出品は可成速かなるを要し候間集りたる金高に應じ其筋の方々とも謀り主唱者の相談を以て決定可の致に付此段御承知被成下度候也

主唱者

女子高等師範學校內　山川二葉
下谷區上野櫻木町二番地　爪生しけ
麴町區富士見町五目丁廿二番地　永田けい
同　紀尾井町三番地　武田みつぎ
下谷區竹町十九番地　梶原さし

●製作品天覽　女子職業學校生徒の製作品は、愈先月の二十六日を以て北條侍從より、天覽に供し奉るべき旨口達ありて、造花、裁縫、圖畫、刺繡の製作原料より仕上に至るまでの材料を合せて宮內省へ差出したりとぞ、同校生徒の名譽、如何ばかりならん。

●老媼の献金　福島縣宇多郡八幡村大字坪田の伊作重兵衛の老母千代といへるは、今年八十八歲にも及びたるが、此度の事を聞いて、兼てより貯へ置きし金二十圓を取出でゝ、軍資に献納を願ひ出でしとぞ。いと感ずべきことなり。

●貞婦　の此頃までに賞與を受けたるは、左の如し。

山形縣東村山郡出羽村大字漆山神保倉吉養母　すん

資性温順善く舅姑に事へ殊に夫の眼病に罹るや明を失ひ生計を營む能はざること廿餘年其間舅姑續て歿し又た夫を失ひ赤貧洗ふが如きも自ら家業を勵み傍ら子女に敎育を加へて終に家名を墜さゝる志操貞實洵に奇特とす仍て其賞として

金二圓五十錢下賜す

廣島縣三次郡君田村志野専稱妻
ら　く

資性柔順夫専稱と力を戮せ舅姑に事へて孝養厚く舅病没し姑も亦病を發し遂に聾と爲り起居自由を失ふや夫と交々母を寺院又は劇場に背負ひ耳目を娯ましむる等扶持提携茲に十有八年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

仝　奴可郡西城村赤兇愛助妻
な　つ

資性順良克く舅姑及び夫曾て惡疾に罹り終に癈疾と爲るや家計漸々困難に陥ると雖も毫も屈撓せず専ら手工業に從事し獨力以て藥餌の資に供し且能く夫の嗜好を充たしめ夙夜看護奉養至らざるなく貞節を盡すこと十有八年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金三圓五十錢下賜す

島根縣石見國美濃郡高津村彦十郎母
吉山　きん

平素能く父母に事へて孝順就中父老し母羅病以來家計貧困に陥るも一層意を看護に竭し奉養益々力め其志操を變せざる茲に二十年餘一日の如し洵に奇特に付爲其賞金三圓五十錢下賜候事

●福羽子爵の演說(つゞき)　それから續いて、今日の席へ對してのお約束の先入主となると云ふ方のお話に移りませうが、先入の第一の點は、人と云ふものは萬物の靈であつて、萬物とは違ふと云ふは即ち天性、其天性を助けるものを腦髓へ始めて入れるのが、先入の入れ方である。此先入も前にお話致した時代には、其時代相應のものを先入とする。今日の時代のものは、今日の時代に相應したものを、先入とせねばならぬ。今日の時代に相應したものを先入とするには、唯子供の遊、或は昔話を爲すにも、願くは桃太郎が島へ往つて

島の寶を持つて歸つたと云ふ話はやはりするが宜しい。又併なから其先入に依つては、誤られるものもあるから、誤つたやうな話は、スッカリ除けて置かねバならぬ。是は時代である、今迄言ひ來りたることは、母も言ひ、バアさんも言ふから、皆先入になるやうなことが多いけれども、之を注意して、縱令今までのものは、皆それで育つて惡しきことのなかつたのは、其時代に對しては、惡しくなかつたのであるが、今の世の中には適當せぬことが多いでござりますから、どうぞ其先入を主として、以前の善い話と善くない、話との分別を付けて、昔のお話を、子供に言つて聽かせたり――どうぞ子供に言はせたり、言つたりするやうにせねばならぬ。又各〻其心があつて、小學生以上の人は、願くは徳ある人に就いて――今日徳ありと評する人を定めて、其人に就いて、先入の善いことを、聽かう〱となさらねばならぬのである。先入は、所謂人間たるものは、萬物と變つたるものと云ふのが、天然の性、其結好なるものでありながら、或は生涯を、禽獸にも劣つた行をするものがある。それは第二の天性を助ける道を入れないからのことである。第二の天性を入れゝバ、人間たるものは萬物の靈であるから、わのやうに見る陰もないものがあらう筈はない。成程土地の開けざる所は、交通も不便であり、困難もありませうけれども、あつてもが、人の人たる道を聽かぬで知らぬのはまだ宜しいが、人の道たることを聽損ふて、惡しい人間になつた程殘念

のことはない。其事は何かと云ふと、山中に居つて、世間のことを知らぬものは、道を聽かぬのであるからマダ宜いが都會に居るものが、其道を聽損つて、或は人に誤を爲して、其人が誤に終り、遂に身を立て道を行ふことを忘れて、自然人の厄介になる男女が多いでござります。是は何かと言はゞ、第二の先入の德がない故に、斯の如くなつたものと考へます。扨て其先入には、有効なる人の德を耳に入れることに注意するのが第一、それから書物を讀まうとすれば、書物の注意がいります。書物の注意は、世間に我輩と同論である人もあり。或は同論でない人もあるが、先づ學問上から言へば、縦――其時は行ひ得られぬ高尚のことであらうとも、德義ある言語、或は德義ある行の跡を探ねた書と云ふものを、先きに讀んで、其時は唯字の句讀の讀方を學ぶ如き有様であつても、之を腦髓に溜めて置けば、將來年が寄つても、立歸り〳〵腦髓に益を得ることがあるから、先きにむつかしい書物を讀んで、それを行へと云ふことは言はぬが、讀んで置くと云ふことはするが宜いと思ふ。併し又一種の學者の說に依れば、腦髓の度に併せて讀ませねば――腦髓の發達せぬ中はたやすいものを敎へ、年の長ずるに隨つて其時時に應ずるむつかしい書物を讀ますするが便利であると云ふ說もある。是はまだ兩說とも、どちらが勝つとも負けるとも限らぬが、我輩の論は、決してむつかしいものを先きに行へとは言はぬけれども、聖賢の語、德義ある人の行、道をば、耳に

挾んで置けバ、其時は分からぬが、一生涯の中に幾度か繰返して考へれバ、遂にそれを行ふことが出來ると考へます。是はどちらにどうとも定論のきまつたことではないから、茲では諸君の意もあらうが、人に敎へ爲すときは、斯う云ふ時の注意もいると云ふことはなければならぬ道理であります。さうするには、不義德なることは、耳にも入れぬやうにせねばならぬと云ふものは、能く皆樣考へて御覽なさると分りますが、決してそれに就いて奇な行をするやうなことはない、奇なことをしてはならぬから、どちらへ間違つても宜しいやうなことは、其人に任かして置き、任かして置いてならぬことは、自分が斯うすると云ふ判斷を付けねバならぬ。さうする以上になると、

彼の人の信ずる宗教のことは樣々であつて、人の述べたあとであるから、我輩も述べぬが、併しながら謂はれなく、人の爲すべきこと、行ふべきことにケチを附けたり、日の善惡を選んだり、爲すべからざることを爲すことが世間にありますが、あー云ふことは、文明の世には不適當のものであるから、之を幼少なる者に向つて敎へてならぬのみならず、其身に行へバ、幼少のものに感ずることであるから、其事をも先入に入れぬやうにせねばならぬ、マダむづかしいことがある。それは先入の注意と云ふことである。學校では先入に善い事を聽かせやうと思ふて、學校へ上げますが、家内で行ふときはどうかと云ふと――德の行はどうであるかと云ふと、せいでも宜いこと

をして、人の道にあるまじきことをして見せて、さうして其子供を學校で育つて貰つて、善い者にしたいと云ふ欲望を遂げやうとする。家内で亭主が不品行をすれバ、妻は泣いて居ると云ふやうなことがある。それは後にお話をしませうが、所謂力ある和合どころではない、不和合になることを先入にいれるのでありまず、斯ふ云ふ樣な不都合があるので、實に殘念の世の中であるから、どうぞ家の治め方に注意をして、善と思ふものは先入に入れ、悪と云ふことは決して幼少の耳に入れぬやうにして、我身のそれらに關はらぬやうにして往かねばならぬ。さう云ふやうにして、世の中に注意せしむるやうにせねバならぬ。尙曩きに述べました通り、維新前後の德義の大小の界と云ふものを能く分別して、先入の道をも、德を得るやうに致さねばならぬのであります。

それから致して、言語動作は即ち交を爲す所の道であるから、繰返しても申したいのは、言語動作であるが、餘り小さい事にもなり、申す間敷ことにもなりますから、餘り細かには述べぬ積りであるが言語には、人の厚情が現はれると考へますれども、其厚情の現はれるのは表面のことで、心の現はれるのが元であります。其心の現はれるには、心の度を定めて言語を述べねばならぬものであります、心の度と云ふものを以て、それから言語を發せねばならぬものであります。心の度と云ふものを申して見れば、今日人の境遇に依つて、いろ〳〵心の度はござりますけれども、總體の人の心の度

と云ふものがなければならぬ。其總体の人の心の度と云ふものは、以前の世の中で言へバ卑下する──向ふを敬しこちらを卑しくすると云ふことは離れられぬけれども、人の度と云ふものは、吾れは一國の國民である。天子の指を折つて御待ちなさる人の數が幾萬幾千あると云ふ其數の中の一人であつて、其昔の王政の時には百姓と云ふ字に「おほんたから」と云ふ假名が付いてある。萬民は悉く　天子の御寶物で、たからである。悉く天子の寶であると云ふことであるから、人の心は一人々々皆天子の寶じやと云ふ度を持たねばならぬ。其度を以て敬することは敬し、謙ることは謙らねバならぬ、どうぞ謙る上にも、チヤンと人の度をきめて置いて、傲慢の裝もなくせねバならぬ。謙つて裝を示す言語も必要である。

（つゞく）

兼題

- 九月廿日
  - 歌……名所擣衣
  - 文……孝貞の解
- 十月五日
  - 歌……新嘗祭
  - 文……紅葉狩の記

教の庭

九月五日兼題　初雁

天　長野縣東筑摩郡鹽尻村　河野文子

聞きなれし聲と去りつゝ初かりの
くる秋ごとにめづらしきかな

地　府下赤坂區一ッ木町　羽田三緒子

思はずも月みてふくるあきの夜に
きゝてうれしき初かりのこゑ

人　和歌山縣日高郡藤田村　瀬戸さと子

限もなくてらせる月にうかれてか
あなめづらしのかりの一つら

青木春子

有明のつきになのりておほろらに
ひとつらわたる初かりのこゑ

（天地人のほかは原稿到着順なり）

石井徳子

初雁のこゑめづらしく聞こゆれど
さびしきあきの風もいとはず

吉田武子

門田ふく稲葉のかせにおくられて
はつかりがねのなき渡るかな

吉田芳子

誰がいそぐ使なるらむなきつれて
くも路をわたる初かりのこゑ

永井さい子

遥かなる雲路をいまやこしのねの
あらしにたがふはつ雁のこゑ

大橋廣江

天雲のまよふみそらをはつかりの
つらも亂さずわたりきにけり

西澤あや子

久方のあまつみそらをはつかりの
いやめづらしく音づれにけり

大橋兼子

久かたの雲井をわたるはつかりは
いづこを宿とさして行くらん

待ちわびしわがふるさとの音信と
きけばなつかしはつかりの聲　大橋あさ子

獨寢るよはのねざめをとひがほに
こゑもまぢかくすぐるはつ雁　神田榮子

數ふれどあきもなかばの雲井より
ほのかになのるはつかりの聲　溝口秀子

山田もるしづがかりほの軒ちかく
はつ雁がねのなきわたるなり　西村菊子

暮れそむるゆふべの空よはつ雁の
こゑめづらしく鳴き渡るかな　溝口惠子

秋の夜に月のみふねにろをおして
ならびてわたるはつかりの聲　江馬信子

小夜ふかき枕邊ちかくおとづれて
ゆめおどろかす初かりのこゑ　磯部つや子

小夜中の月もをしとやきゝつらん
かどのわさ田に初かりのこゑ　菅谷こう子

初かりの門田におつるこゑきゝて
なほいそぐらん秋のきぬゝも　羽田千世子

初がりの聲きゝいでゝながむれど　河田いし子
まだおほぞらにはれぬ朝ぎり

淋しさのいとゞまされる秋の夜に　佐藤敬子
おとづれそむるかりがねの聲

久方のつきはまぢかくきゝつらん　竹内淑子
あまのとわたる初かりのこゑ

秋毎のちぎりたかへずかりがねの　碓井信子
ちさとこゑきて今ぞなくなる

都をも見すてゝ行きしかりがねの　碓井武子
けさめづらしくなき渡るかな

秋風にゆめおどろかすはつかりの　碓井和可子
こゑをまくらにちかくきく哉

山さまにわさ田かりがね聲すなり　佐々有鄰子
こしの白根はいつたちにけん

いづくともねぐら定めず小夜更て　德永萬壽子
雲路にむせぶはつがりのこゑ

秋風のおともしるべにゆふまぐれ　澤田春子
くも井をわたるはつかりの聲

立ち渡る朝ぎりかくれきこゆなり　千々波橋子
わさ田かりがね今かきぬらん

玉づさの便りをそらにかくむかり
　ことしもきくや初かりのこゑ　馬島久仁子

古郷のあさのけしきはいかにかと
　いまさしかりに問てみましな　香川　穎子

何方をさしてゆくらんはるばると
　けさなきわたる初かりのこゑ　諏訪　晴子

夜もすがら枕にちかくきこゆなり
　くも路にまどふはつかりの聲　久保田律子

越路なる友におひ見しこゝ地して
　いとゞ嬉しきはつかりのこゑ　松田　靜枝

秋萩のうつろひゆく比をしけれど
　またなつかしきはつかりの聲　松田いし子

呼かはすこゑも今宵ははつかづき
　かげすむ空にかりぞわたれる　松田　孝子

今日よりは衾かさねんはつかりに
　夜寒もそうてわたり來にけり　松田　繼子

越路よりはるばる遠くわたりきて
　あさまだきなくはつかりの聲　高橋ぬい子

朝夕にまちしかひありはるばると
　きこえ來にけり初かりのこゑ　高橋　安子

故郷にかよふゆめをばやぶりつゝ
　うはの空ゆくはつかりのこゑ　川瀬　繁子

端ゐして軒端をもるゝつきみれば
　はつ音ゆかしく雁なきわたる　川瀬　菊子

初かりのなく聲さむくきこゆなり
　あきたつけふの夕ぐれのそら　高橋　政子

哀れをも我身にとめてはつかりの
　なく一こゑのうらめしきかな　山田　先子

物思ふあきの深ふかきふみまどに
　かすかになのる初かりのこゑ　藤澤　元子

身にぞしむころも夜寒のあき風に
　さそはれわたるはつかりの聲　高井　孟子

秋風になかつゝまやまきりはれて
　はつかりがねのなき渡る見ゆ　大橋てい子

雲のゐる山にはつかりかず見ゐて
　やがておちくる初かりのこゑ　大橋さる子

おのがねに秋やちりけんかり金の
　都をたびとおとづれにけり　岡　佐波子

吹く風にこてふの夢もやぶられて　藤本　琴子
まくらべちかくなけるはつ雁

友どちをあとに見なして來る雁は　谷川　清子
たがおとづれをまづ急ぐらん

秋はぎの下葉いろつきおくつゆは　加納　嘉子
はつ雁がねのなみだなるらん

初雁はとこ世をいでゝいくさとの　土生　清子
つきに哀れをそへて來つらん

秋風よふかれこしぢのくもの上に　上野　兼子
けさぞきこゆるはつかりの聲

秋風にさそはれいでゝはつかりは　高井　米子
くも井遠くもなきわたるなり

立こめてくるともみわぬ秋ぎりの　大久保近子
そらにきこゆるはつ雁のこゑ

月夜よし夜よしとみつるなか空に　藥師寺芳子
おもひかけきや初かりのこゑ

秋風のさそひ來つらん今朝ははや　内藤　清子
はつかりがねの聲きこゆなり

うき秋のものとおもへど初かりの　鳥山　龜子
とわたる聲のめづらしきかな

思ひわびいまはとおふぐ大そらに　野尻　鶴子
はしなく名のる初かりのこゑ

秋かせのふきのまに〳〵聞ゆなり　降田　槙子
けさつゝらしきはつかりの聲

此の日比まつかひありて嬉しくも　井出　信子
そらかきこゆる今朝のはつ雁

澄み昇る月をみるべにはつかりは　黒澤　松枝
くも井はるかになき渡るなり

さむさをや翅にかけてわたるらむ　荒瀬　房子
初かりがねのこゑぞ身にしむ

有つきに誰がことづてや急ぐらん　植木　鋼子
まくらのやまをすくるはつ雁

風そよぐ門田の早稲もかり初めて　齋藤　菊子
くも井に聞ゆはつかりのこゑ

春かすみ立ちてわかれし其ひとに　中村　國子
さきだちてきく初かりのこゑ

月澄みて風もすゞしく吹く夜半に　村松きん子
ちかく聞ゆるはつかりのこゑ

隔てつる友にあひ見しこゝ地して　師岡千代子
うれしかりけりはつ雁のこゑ

心あてに便りもがなとまつよひの　土屋てい子
みゝにうれしき初かりのこゑ

秋風のかよふくも井にめづらしく　大枝秀子
はつかりがねの鳴き渡る見ゆ

秋くれど時をたがへではつがりの　内田竹子
こゑはづかまも鳴き渡るかな

ほのかにも夜半の枕にひゞくなり　天野露子
空鳴きわたるはつがりのこゑ

秋風のたよりのまゝにはつかりの　平野君子
そらなき渡るこゑのきこゆる

九月五日兼題　疾を訪ふ文

天　松山市鉄炮町　鳥山龜子

八月とはいへど元のこよみにては猶文月の空なれは殘るあつさのいと堪へがたうなんされどにや先つ頃より御こゝち例ならずとうけ給はりぬこのほどはいかゞわたらせ給へるおぼつかなく思ひ給ふれどふりはへてこそ訪ひ侍らまほしけれど昨日けふやみ難き事の侍れば本意ならずもせうそこしてきこゑあぐるになんなめげの罪はゆるし給ひて御病のさまつゝまはずつばらかに此のものにかたりきかせ給はん事をこひのみまつるかしあなかしこ

地　大坂府西成郡今宮村　松田靜枝

萩の下葉色つき初めて今朝しもめづらしく鹿のこゑ耳に入りぬ御あたりは如何に候はん久しう音信を欠きまゐらせし罪ゆるし給ひてよさてもけふある人のとひ來てかたるをきけば君にはさいつころより流行病に打ち伏し給ひぬとかとくにもまゐらましかどとぶらひまゐらすべきをいと口惜うなん今は開明の御代ゆゑ何某の寺の聖を召さでも醫學博士の一匙には回生の藥も盛らると承り侍れ心靜かにとくおこたらせ給へとくおこたりて玉の御足をまげ給へや萩の花のうつろはぬまに鹿の音の絶えせぬ間に

人

佐賀縣東松浦郡唐津町　藤本琴子

過ぐる日はま邊の松の下にてはなれぬ袖を引きはなちあなたこなたに別れしより心は片ときも御そむをはなれず今日の暑さやいかならんこよひの月やいかならんこの清き月にむかひては學の道をやいそしみたまふらんをり〳〵は此なたの空をも打見おこせ給ふらんなど思ひ居りしに先つ頃より病の床に打ふしたまひぬとかさらでたゞならぬ旅ねはかなしきにまだ久しくもすみたまはぬ他郷の病の身いかに心細くおはすらんくすしはたれにか名におふ都の事なれど名高き醫師も數多くおはすらんと少しは心易くはべりされどくすしの言の葉はよく守りたまへ病の中は食物こそ大切なれ不消化物などめさぬ樣能〳〵心をつけられよ道のり近き所ならましかどふつゝかながら御側ゑはべらましものをいふかひなき女の身をいかにせんかく思ひ廻せバ胸の思はやるせなくこそあはれ朝夕まくらべに侍りていたはるはいかなる人ぞやさしとはいへあだし人なれど心置きたまふ事もあらんといと御いたはしくてなんわらはのかく父母のほとりにありながら此頃の秋の夕はかなしきにましてよもすがらいたづきにうまいもなり給はで永き夜すがらかりがねきり〳〵すをきゝねやにさし入る月影を見てはいかにあはれと覺えたまふらんあはれかゝる事のありと知りなば別るゝときになどかとめざりけんひな〳〵姉君には世にもめでたき望をいだかれ遠き都の文の林に入りたまふをとゞめまゐらせていかにせんやかねてすこやかにおはす身なれどいかなる病にかゝらるともいかで怠たらぬ事やあるさるをわらはのせまき心より益なきくり事をならべたるおろかさよゆるし給へよ姉の君故里なる父君も母君もいとすこやかにおはすぞかし案じたまはず心丈夫に養生しとく全快したまひてはやく目的を遂げられよかへす〳〵も醫師の言葉にそむきたまはずよろづに心を注け給へやよあなかしこ

吉田　芳子

久しう音信給はぬを暑さ寒さの變り易き此頃いかがおはすらむと心もとなく思ひ侍りしにきのふ某の御家とふらひし歸りなりとて立ち寄られ思ひもかけぬ御令孃の先きつ日より肺病の氣味にて打ちなやみおはすと始めて承りぬとくより知らましかは御訪ひ侍らましをいとくやしうてなむ今は此道につきて名高きくすしもありときゝ侍れどましこらかし給はでとくをさめ給へかし萬はさふらひてのち聞え上げたく取あへずかくなむあなかしこ

佐々有鄰子

此ごろのあつさも桐の一葉をさそふ夕風にいつとなうわするゝばかりになり侍るを姉君のかきこもりたまへる病の床はいかにくらしたまふらん妾でときいたづきしらぬ心にはいと〳〵くるしうおもひたまふるのみあなかしこて姉君の御心さはやかにはや〳〵立かへりたまへと神かけていのりまゐらするものから一言かくなん御心のまに〳〵御かへりごと待奉るよなんかしこ

香川　穎子

軒の秋風秋の調べとなり侍りしより大方の人は哀れ身にしむなどいふめれど物學びする身にはなかなかに嬉しき折から君にはいにし頃より病の床に起臥し給へりと承りていとも〳〵驚き侍り日頃み心もちゐよくていとすくやかにおはせし君がいかでかう俄になど思ひ給へらるゝ物から此の頃の御心地いかにますらん母君の御情厚き看護はくすしのわざよりもいとまされバやがておこたり給はんこともあるかるべきに今しばしが程と念じ給へかし近き日御館にさふらひて萬に御有樣伺ひきこゆべけれど取あへず御とぶらひまでにかくなむあなかしこ

高橋　安子

いまだに暑ささり難くいかに御はし給ふらんと思ひ侍りしにある人のとひ來て此頃君が御いたつきにてなやみ給ふよし物語るを聞きておどろき侍りぬとくより知らましかは尋ね奉らんものをといとくやし昨日今日はいかにおはしますらん御療養勉

めてとくおこたり給へ近きうちにさむらひて萬閑
ゐまつらんかしあなかしこ

閑 佐波子

かねて御すくれさせ給はざりし故此頃の氣候不順には如何に過させ給ふらんと今しも案じまゐらせ居しによべより御腹痛にていたく苦ませ給ふとかや常にすこやかなる身も此暑さにはたへ難く身も鎔けんはかりに思ひ侍るにまして御病中はいかにとおしはかりまゐらするもなか〳〵になんさりながらかのいまはしき流行病にもおはしまさずまして醫師も有名の御方〳〵にて御看護も手厚く御行屆き給ふへければ日ならず御全快の御事とは存上侍れども何分暑さのころはひゆゑ何は御保養の第一なるは妾の申上侍るもおろかの事になんさて此鶏卵は手飼のが產みたるものに侍れば輕少ながら御目にかけ侍りあはれ納めさせ給はゞこよなううれしくなん何れよさりには御とふらひ侍らんかし
あなかしこ

降田 槇子

久しう音信給はぬは御物學びのしげきにやと思ひ侍りしにさいつ頃より御母君の病の床に打臥し給ひて御まもりにいとまあらせぬ爲とか今朝はじめて承りいたう驚き侍りぬ今は如何におはしますらん御心づかひのほども推しはかり侍りぬさることといつゆ知らで等閑に過ぐしつるがいとくやしく而にもさぶらはんが本意なれどさりがたき事の侍れば取あへず文もて御有様うかゞひ侍るになんこはあやしきものに侍れどおとぎの料にもと送りまゐらするになんあなかしこ

師岡千代子

一日の花野のいせうえうの後まれること多くて御消息もうけたまはらぬを今日なむ某の君のとひきましてころの夜さりより病ませ給ふと初めて承りていと〳〵驚き入はへりきのふけふいかにかおはしますらんとくより知らましかは御訪ひもし侍らましを罪さり處なくなむけに此のころの朝夕の風はさらぬ身にしみとしみわたるをまして日頃ひわつ

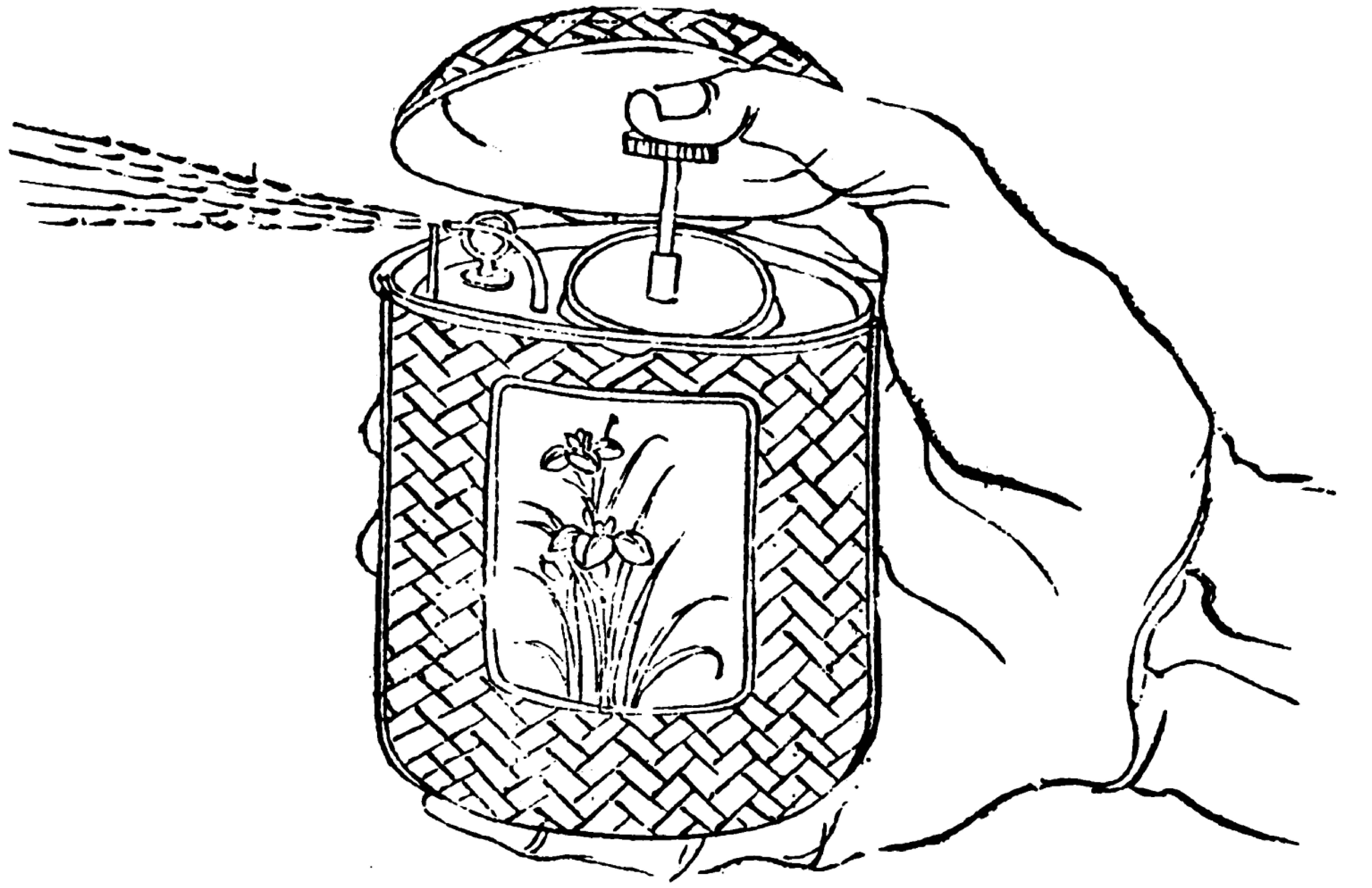
よおはせはいかはかりかなやませ給はんいとよういとはせ給ひてとくをこたらせ給はむことをまちはへるになむ萬は近う侍ひて聞上へきをまつはとりあへすかくのみなむあなかしこ

土屋てい子

久しく對面賜らねは君はわたりいかしわたらせ賜うらんといと／＼直しくおもひ侍るに御消息賜はりいかにも嬉しさにいそきひらき侍れは御病したまひて大殿こもらせたまへるよしさてはとおどろき侍りき姿いとゞいたくむねとゞろき侍るたゞちに參りて御ありさまをもみ參らせんと心いられはし侍れと家あるしのおはやけことをうけて外に侍れは今日はえ參らすさて菓物一籠參らせるあすなんかならす參り侍りて對面賜らんとおもひ參らせ侍るさては申すまても侍らねと御あつしさもやかておこたらせたまひなんあなかしこふみして童女使につけて參らせ侍る

高作貞子

時しも氣候のかはりめにて余つさへのこりのあつさ殊の外たえがたく侍れど昨日けふのおん消息一重にきかまほしう思ひはべりし折からゆくりなくもつねに君のおたよりにて此程は常ならずおはしますとかや承り時節がらいかに此日をけし給ふらんと思ひ參るこゝろはたゞならずなていかにもおんそばにまゐり萬細やかに伺がはまほしきは身も爰にわらぬ心地し侍れど諸共に學びのやかたを出でしより折ふしの物にふれ事につけつゝ互にへだつる病を思ひかこつはけふ更にもあらねど是非なく今は一日もはやく勝れさせ給ふやう起きふし影ながらいのりはべるよりせんすべもあらじもとよりおぬかりはおはさぬなれど病はことに始め大事のものに侍れどよきが上にも賴もしきくすしを撰み給ひておん心強くひたすら御保養に余念なきはどこそかへす／＼もねがはしけれ遠からずいつものけなげなるお筆のあとをと夫のみ待ちつゝけはべるべくなん先は驚きの余りとりあへず一筆の走りがきなめげなるは一重にゆるいたまひてよかして



今般弊店に於て専賣特許を出願中なる懐中香

水吹

の儀は弊店が多年當地製作に従事し幾多の經驗と工夫とを凝せしに今般漸く其整功を見るに到れり此器具は最も輕便調法なる新奇發明品なれば裝飾用は勿論紳士貴婦人方は衛生上御携帯品として片時も欠く可らざる必要品なれば何卒御試用の上如何ゞ實用に適するかを御證明被成下度

定價

水量四十グラム入

真鍮製　金八十五錢

洋銀製　金一圓

其他合銀赤銅四分一等御好次第調進仕候

近時種々の新發明新工夫の品物尠とせず然れども弊店發明の懐中香水吹の如き定價廉にして啻に香水に止まらず散布用一切に適當なるは他に此類あるを見ず之實に弊店獨得の發明なり今般賣擴めの爲め多年御引立を蒙りたる御花主様へ御禮として實價にて發賣仕候間御試用の上は御朋友様方へ御吹聽の程奉希願候尚又弊店調進の袋物、紙入、煙草入、煙管筒、煙管、指環、帯留、其の外貴金屬釦、玉、合石、象嵌、等の品々總て貴顯紳士令嬢令閨方の御[illegible]帶[illegible]裝飾品は猶一層職工を勵まし其製作と彫刻とを吟味致し調進仕候且品柄は堅牢優美にして坊間尋常の品とは一見雲泥の差あるは名譽花主様の疾に知らるゝ處とす且つ弊店の店則として懸直又は巧言等は不申上精々相働き正價を以て御調進申上萬事信用専一に營業仕候に付多少を問はず御用被仰付度此段併て奉願上候

東京市京橋區銀座三丁目十一番地（電話加設中）

袋物及貴金屬裝飾品商

丸屋商店

金子直吉謹言

●文部省檢定濟

副島伯爵校閲
東久世伯爵著
松本楓湖畫

尋常小學修身入門	全一册	一册金二錢八厘
仝　教師用	全一册	一册金七錢
尋常小學修身書	全四册	毎册金七錢八厘
仝　教師用	全四册	毎册金十二錢
高等小學修身書	全四册	毎册金九錢七厘
仝　教師用	全四册	毎册金廿五錢
尋常小學國史談	全二册	毎册金十錢
高等小學國史	全三册	毎册金十九錢
尋常小學修身書掛圖	全部	

發兌所　國光社

女鑑第六十九號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回 五日 廿日 發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號活字二十
詰一行金二十錢

明治廿七年九月九日印刷
同 年同月十日發行

發行兼印刷人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞
編輯人 同 山根勇藏
發行所 同 國光社